明治三十七年七月二十四日發行（毎月二十日本會發行）

婦人衛生雜誌

第百七拾六號

私立大日本婦人衛生會

第三種郵便物認可明治廿六年四月四日
毎月一回二十日發行
内務省許可明治二十一年三月二十八日

婦人衛生雜誌

第百七拾六號 目次

暑中休會

本會例會の義來八月及九月は炎暑中に付例により休會致し候也

但雜誌は右に拘はらず休刊なく發行の事

明治三十七年七月

私立 大日本婦人衛生會

▲本會事務所移轉

東京市麴町區飯田町六丁目二番地

▲爲替振込は

（飯田橋通郵便受取所）

私立大日本婦人衛生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみをもて足れりとするにはあらずかならずや智識を附きたる本分を盡くし幸福快樂のうちに一生を送らんを皆ともに希はざるはあらじされども其身健康にあらざれば此生活を得んをいと易からずこれ衛生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす

抑も〳〵衛生の法は一にして足らずとはいへども衣食住の三者育兒及看病法の如きはいとも緊要の事にして皆婦人のもつはら掌るべき所其責任重しと云ふべし今や婦人の會合相尋て起り婦人社會も漸くに其の面目を改めんとするは甚だ喜ばしきことなりされども其衛生の事に在りては更に注意を怠るかざるものゝ如くまことに口惜しきことなり因て頃日同志婦人集ひ謀り一會を設け名けて私立大日本婦人衛生會といひ毎月一同集會を開き學識經驗ある人々を招き請して衛生上の諸說談話を聽き互に相研究し衛生の[illegible]記して冊子を編輯し會員に分ち聊か同胞の爲めに盡すあらんとす茲に本會旨趣の梗概を叙べて廣く江湖の諸姉妹に告け其發成を仰ふことしかり

明治二十年十一月

首唱者總代

私立大日本婦人衛生會規則

（明治廿二年十二月改正）

●第一章 目的

第一條 本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究し衛生上の智識を開發せしめ以て社會一般の幸福を增進するにあり

●第二章 名稱位置

第二條 本會は私立大日本婦人衛生會と稱し之を東京に置き地方に支會を設く

[illegible]

[illegible]

本會雜誌を以て報告すべし
第卅二條　會費金は受領證を交付すべしと雖も地方會員にして小爲替又は郵券にて納むるものは受領證送致として別に返信料を添へらるべし(郵券二錢)
第卅三條　會費は東京府下に限り毎月領收人差出すべし地方會員は總て前金とし小爲替にて本會事務所々在の郵便局(麹町飯田橋通)振出しあるべし
第卅四條　會員中若し本會の障害となるべき所爲ある者又は屢々會費を督促するも納付せざる者あるときは會長評議會の決議を經て除名し若くは勸告することあるべし
第卅五條　本規則は會長の意見又は會員二十名以上の賛成に依り總會の決議を經るに非ざれば之を更正することを得ず

事務所　東京市麹町區飯田町六丁目三番地

私立大日本婦人衛生會

●役員姓名

總裁　東伏見宮依仁親王妃　周子殿下
會長　侯爵夫人　鍋島榮子
副會長　濱尾作子
（いろは順）
幹事　鳩山春子
仝　羽田三緒子
仝　岡田德子
仝　高木かう子
仝　山本多穗子
仝　佐々木芳子
仝　三浦敎子
評議員　伊集院しけ子
仝　石川良子
仝　濱田捨子
仝　仁禮壽賀子
仝　四[illegible]升子
仝　穗積歌子
仝　緒方悅子
仝　岡山とし子
仝　男爵夫人　加藤鈴子
仝　片山龜子
仝　子爵夫人　山中いよ子
仝　丹波貞子
仝　高橋孝子
仝　田村きよ子
仝　相馬陸子
仝　男爵夫人　南部限子
仝　中濱芳子
仝　伯爵夫人　松平光子
仝　子爵夫人　松井正子
仝　子爵夫人　松平久子
仝　木場小ゆり子
仝　岸澄子
仝　三宅藤子
仝　宮本樂子
仝　宮下咲子

●支會　千葉、新潟、山形、宇都宮、茨城、高崎、米澤

本會特別賛成員

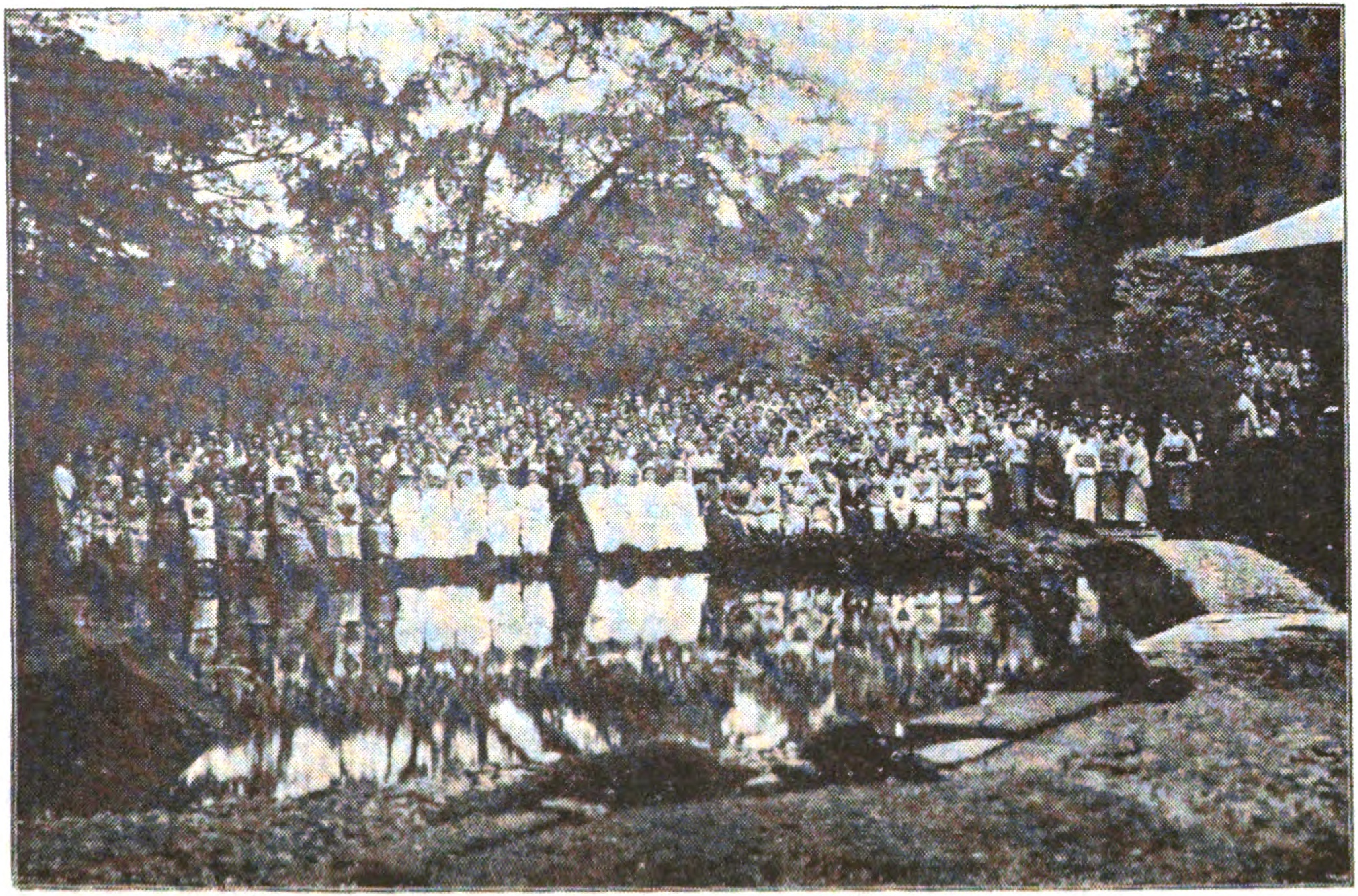
（●は本會及支會に於て講演せられし諸氏）

醫學博士　●入澤達吉君
理學博士　●飯島魁君
ドクトル　●伊澤信平君
●色川圀士君
醫學士　●伊東祐彥君
ドクトル　●飯盛挺造君
醫學博士　●伊藤隼三君
理學博士　●石川千代松君
[illegible]　●岩井禎造君
醫學士　●石原久君
貴族院議員　濱尾新君
醫學博士　○濱田玄達君
法學博士　●鳩山和夫君
東京　萩原綱四郎君
醫學士　●芳賀榮二郎君
衛生局長　●長谷川泰君
新潟　●長谷川一證君
小兒科　小原賴之君
醫學士　●林春雄君
醫學士　●佐藤達次郎君
醫學博士　●緒方正規君

步兵少佐　●堀內文次郎君
醫學博士　●土肥慶藏君
醫學博士　●濱田和一郎君
醫學博士　●入澤謙二君
醫學士　大西秀治君
醫學博士　●大澤岳太郎君
一等藥劑官　●恩田重信君
醫學士　●若杉喜三郎君
男爵　加藤弘之君
ドクトル　●加藤照麿君
醫學士　●賀古鶴所君
醫學博士　●河本重次郎君
醫學博士　●片山國嘉君
醫學士　●川上雅量君
ドクトル　●金杉英五郎君
醫學博士　●笠原光興君
醫學博士　●高橋順太郎君
ドクトル　●高山紀齋君
醫學博士　●高木兼寛君
法學博士　●高木豐三君
醫學士　●田代義德君
新潟　●田代亮助君
男爵　高崎正風君
醫學士　竹中成憲君
醫學士　●高田畊安君
新潟醫學校長　●高橋辰五郎君
藥學博士　●丹波敬三君
醫學博士　高橋貞碩君
藥學博士　●田原良純君
醫學博士　●田村光顯君
醫學士　●久保猪之吉君
醫學士　米山彥郎君
三等軍醫正　●星野森光君
醫學士　●宮本叔君
[illegible]　○磯井忠悅君

大日本教育會長　辻新次君
理學博士　●坪井正五郎君
醫學博士　●長與稱吉君
男爵　南部甕男君
藥學博士　●長井長義君
醫學博士　●中濱東一郎君
醫學士　●栗本庸勝君
海軍少佐　●小笠原長生君
醫學博士　村松[illegible]三君
醫學博士　●[illegible]川宗雄君
醫學博士　●栗本東明君
醫學士　●山田鐵三君
醫學士　●山田弘倫君
[illegible]　●山根正次君
[illegible]　山川春二君
醫學士　●丸茂文良君
衛生試驗所技手　●丸山長四郎君
ドクトル　●松山陽太郎君
ドクトル　●小此木信六郎君
盲啞學校長　●小西信八君
[illegible]　小泉親君
醫學士　●古川榮君
東京　布施正頤君
[illegible]　●後藤新平君
[illegible]　●エ、ベルツ君
醫學士　●中野榮君
文部書記官　●寺田勇吉君
子爵　秋元興朝君
前軍醫總監　●足立寛君
ドクトル　新井川吉芳君
ドクトル　宮下造君
高崎醫會長　十谷全次君
産科婦人科　●永京淑君
ドクトル　●久保田誠麿君

醫學博士　●佐々木政吉君
醫學士　●淺田決君
ドクトル　●朝倉文三君
ドクトル　●朝山義六君
高崎　秋山聰太郎君
醫學博士　佐藤三吉君
醫學士　櫻井郁二郎君
醫學士　●佐藤恒久君
ドクトル　●佐伯理一郎君
ドクトル　榊順次郎君
醫學士　●榊保三郎君
醫學士　●櫻井恒次郎君
醫學博士　●桐淵鏡次君
醫學士　●北村精造君
ドクトル　●北川乙二郎君
醫學士　●木下正中君
醫學士　●北島小太郎君
醫學博士　●北里柴三郎君
醫學博士　●三浦守治君
醫學博士　●三浦謹之助君
小兒科專門　●宮本仲君
理學博士　●箕作佳吉君
醫學博士　●三島通良君
醫學博士　●三宅秀君
醫學士　●三輪信太郎君
伯爵　●土方久元君
醫學士　●島村俊一君
醫學博士　●山田長君
ドクトル　●須川皐樹君
●ミスヒユース
醫學博士　森林太郎君
醫學士　●笹川三男三君
醫學士　●波多野淳君
醫學博士　●矢秀三君
八[illegible]子　松田秀賀君



小石川後樂園ニ於ケルマツヤイー女史歡迎會

婦人衛生雑誌第百七拾六號
（明治三十七年七月二十四日發行）

名家演壇

海軍雑話

子爵　海軍少佐　小笠原長生君講話
伽速記事務所員速記

戰爭の御話をしろと云ふことでありますが、其前に少し軍艦内の衛生の事を御話いたしたいと思ひます、併し私は醫學の方は一向知りませぬですから、唯だ私が船に乘ッて居りました時に見ましたゞけの事を御話しやうと思ひます。

唯今も土肥博士が御話になりました通り、軍隊の病氣は非常に恐ろしいものでございまして、定めし皆さんも軍隊の健康と云ふ事に付ては始終御心に御懸けになッて居らるゝことゝ思ひます、戰爭が始まりましてから後私どもの所へ種々の手紙が諸方から參ります、既に此間初瀬吉野の不幸がありました時などは、随分叱られた手紙が澤山參りましたが、其中で新聞にも出して置きましたが、女文字で唯だ「東郷さん身體を大切にして下さい」と云ふことが書いてある手紙が來たのです、唯だそれだけ書いてある、それでチョット見ますと實に一の滑稽かの如くに見えますけれども、其覺束ない女文字で書いた其人の眞情を考へて見ますと、實に涙の溢れるやうな心持だと思ひます、と云ふのは初瀬吉野は不幸に逢ふたが東郷さんが在るならばと云ふ東郷司令長官の身を思ふ餘りに出たのである、所謂貧者の一燈であッて、長々と種々議論などを書かれたものよりは、より多くの感情を私どもに與へたのでございます、斯の如く一般の人等が東郷司令長官は無論のこと、其他軍隊の事に付ていろ〳〵と御心配になります、そこで本會は衛生會と云ふことでありますから、艦内の衛生の事に付て先づ御話いたしたいと思ひます。

健康な身體でなければ決して立派な精神は宿るまい

と思ふのでありまして、幾ら氣が張ッて居らうが意地が強からうが、身體が續かなければ迚も或る困苦に耐えることは出來ないと私は思ふのである、殊に海軍は船に乘ッて居るから、內地にでも居れば病人が出來たソレ歸れと云ふ風に歸ることが出來ますけれども、出征でもして居る時に病人が出來ればそれだけ戰鬪力が少なくなるのです、既に此間初瀨吉野の二艘が沈沒した爲に八百四十何人と云ふ人が空しく魚腹に葬られた、いろ〳〵の書物を見ると、船は惜しくないが長い月日を掛けて熟練をさせた人間は實に惜しい、船は金さへ出せば出來るが、人は直ちに出來るものでないから非常に惜しいと云ふ事が書いてありましたが、先づ假りに日本の海軍に船が百艘あるとして、水雷艇まで入れるとモッと多うございますが、假りに百艘として一艘の船に十人づゝの病人が居れば百艘で千人になる、即ち其千人だけの戰鬪力は失ッて仕舞ふ、吉野初瀨の二艘を失ふよりも多くの戰鬪力を失ッて仕舞ふ、斯の如く大事である、所が今度あたりの病人の比較を見ると幸に非常に少ないのである、少ないのは詰り衞生が行屆くと云ふ點ではあるまいかと思ひますから、極くザット衞生の事を御話をして、さうして戰爭の御話をしやうと思ひます。

衣食住に分けて言ふと一番初めが衣服です、衣服は御承知でもありませうが、働く時には黑い衣服は着て居りませぬで、白木綿の衣服を着て居ります、それが大概四着か五着ぐらゐづゝ皆に渡してあッて、時々それを着換へる、所が平常働きもするし又操練もする、或は石炭も積む、或は塗具でもッて諸方を塗る、さう云ふ事をするからモウ二日か三日着て居ると汚なくなつて來る、そこで洗濯が必要になッて來て一週間に二度づゝ洗濯をする、それは戰爭の時には規則立つッて行きはすまいけれども、平常であるならば定ッて居る、即ち火曜日と金曜日とに定つて居る、併し其洗濯と雖もなか〳〵儉約した洗濯のやり方です、水が極く大切であるから極めて儉約し

て使はせる、初め上の方の物から段々洗つて來て靴下などは五度か六度目に洗ふ、其時分には石鹼でもツて白いやうな黒いやうな妙な水になツて仕舞ふ、さう云ふ水で洗濯をして居る、兎に角一週間に二度づゝ洗濯を許すのであります、そこで日曜日になりますと兵隊を列べて、艦長と副長とが一々點檢をして歩く、上衣は無論の話、之を開けさせて、下にフランネルの襦袢を着て居りますが、其裏を返してまて見るのです、何處かに垢が付いて居はしないかと指先で擦ツて見て、垢が出れば直ぐ叱られる、靴下などは最も能く注意しないといかぬ、靴下が汚れて居ッたりすると、足が腐れ出すとか、冬になると凍瘡を病むことがありますから、そこで點檢規則にも靴を脱がせて見ると云ふことがある、中には横着を構えて靴下を穿かないで、いきなり素足に靴を穿いて居る者などがある、さう云ふ者は忽ち叱られる、さう云ふやうに清潔を保たせて行く、又「ほころび」はやかましく言ふ、是は破れて居らうが居るまいが衞生の方には關係しますまいが、身體を嚴格にせぬと總ての事が規則正しく行きませぬから、チャンと切れて居らない衣服を着せて居ります、併し是も船の中で限りがありますから、切れたからとて新らしいものを始終着せて置く譯にいかぬ、故に古くても構はぬ、切れたら針で繕つて置けばそれで許すのです、それは木曜日の午後にやるのです、木曜日と日曜日は船は休暇であります、木曜日には午前に大掃除をします、さうして港に碇泊して居ると午後からは上陸ことを許す、併し悉くは許しませぬ、半分だけ許してアトに殘つた半分が衣服の繕ひをやるのです、所がなか〳〵器用なものでありまして立派に繕ひなどをします、それから休み時間などには自分て毛糸でもッて靴下を編んだり手袋を編んだりして居る者が澤山ある、さう云ふやうに水兵は器用であります、斯うして身體の事は清潔を保つて行く。

それから食事の方はどう云ふ風にして行くかと云ふと、朝夕の二度は麥飯を食べるのです、晝だけはパ

ンであるとか或はビスケットであります、それを買入れます時には軍醫が立會ッて、さうして牛肉なら牛肉の質までを能く檢査してそれを買入れる、それから毎日食べさせる目方が定ッて居る、尤も私は斯う云ふ事は受賣です、今日軍醫の方へ行ッて聞いて來たのです、それで毎日食べさせるのは、パンが五十匁、鑵詰の牛肉が四十匁、魚肉が四十匁、白米が百匁、割麥が三十五匁、乾物が二十匁、茶が五匁、麥湯にする煎ッた麥が一匁、砂糖が六匁、酢が四勺胡椒が若干、鹽が十五匁、油が十五匁、それだけの品を一週間に割當てゝ食はして居る、それを食事に拵へた時には、初め主計官即ち會計さんの所へ持つて來る、何故持つて來るかと云ふに、其直打だけのものを拵へたかどうかと云ふ事を吟味する爲にそれを食べて見る、是は一人前相當の金高の掛つたものであると云ふ事を認めた所で帳簿に印を捺く、それから軍醫の所へ持つて來る、是は見た所た好くても腐敗をしはしまいか、虫でも生くやうなことはないかと云ふ事を調べる爲に軍醫が食べて、愈々宜しいと云ふ所で印を捺く、一番終りに副長の所へ持つて來る、副長が食べて見て是なら宜しいと云ふことになつて、それから配當をする、チャンと給仕人が定つて居る、それは仲間の中から出すので、十人なら十人を一テーブルと定ッて居りますから、運んで來て其處へ置く、それでもまだむやみに食ふ譯にいかぬ、立ッて待ッて居る、其處へ副長が軍醫長を伴れて見廻るのです、何故見廻るかと云ふと、最初檢査を受ける時には良いものを持ッて來て、皆に食べさせるのは實際それと同じものをやッて居るかどうかと云ふ事が分りませぬから一々見廻るのです、東伏見宮殿下は即ち副長の職務を御執りになッて、兵員の食事を召上り、御見廻りになッて居るのでございます、それから酒は平常は飲ませないのでございます、併しながら戰爭に出て居るとか、或は遠方にでも參ッて居ります時には、時間を限り、一人前何程と限つて、艦長なり副長なりの考てもッて酒を許す

こともあります、其他雨でも降つた時に非常に働くとか、或はボートで出て濡れて歸つて來たと云ふやうな時には酒を飲ませる、それを衛生酒と稱へる、衛生酒と云ふと大層旨い酒のやうでありますが、重にラム酒、私は餘り酒を好みませぬからどう云ふ質であるか分らぬが、ラム酒に水を割つたやうなものを飲ませる、尤も一人でもッて二人前飲むと云ふことは禁じて居りますから、札があッて其札と引換へて一ぱいづゝ飲ませるのです、さう云ふ風にして居ります。

それから今度は平常の住ひを清潔にするのはどう云ふ風にするかと云ふと、是が亦なか〳〵厄介なものです、と云ふのは船の中で傳染病が起ッた位始末の惡いことはない、私が昨年千代田と云ふ船に乘ッて北淸の方へ參りました時に、不幸にして赤痢が二度發しましたし、腸窒扶斯が一度發したことがあります、是は特發ではありませぬて、或港へ着いた時に買入れた菜の葉か何かに卵があッたものと見えます、さう云ふ時には實に困るのです、昨年私共が行ッた時は、露西亞が第二期の撤兵をしなかッた後であッて、何時どんな事になるか知れぬと云ふ心配はありましたが、是の方は兵員を熟練させるとか、或は油斷なく自分の職務を勤めて居れば宜いのでありますが、傳染病の發した時ぐらゐ困ることはない、其時は悉く船の底までも掃除をして消毒しなければならぬから、此位困ることはありませぬ、そこで最も淸潔を保たせるが爲に每朝洗ひます、即ち朝起きると直ぐ甲板を潮水でスッカリ洗ふ、此頃であると朝五時に起きて、さうして寢床を疊んで片付けて仕舞ふと甲板の洗ひ方に掛るのでございます、スッカリ潮水を流して其處を椶の根で拵へた刷毛で拭取るので、又下甲板の方は水で洗ふと云ふことはしませぬ、是は水で洗ふと乾かぬと云ふ虞がある爲に、大きな雑巾を搾つて下甲板の方は拭くのでございます、それから土曜日と土曜日には大掃除をやる、此時は下甲板までスッカリ洗ふ、下に置いてある水兵

の衣服を入れてあるものや、或は食器類等總てのものを上甲板へ出して洗ひます、さうして冬などになると乾きが惡い、尤も日本あたりでは直ぐ乾きますが、支那の北の方などで非常な寒さになりますと乾きませぬから、それ故潮水でやッたあとを淡水で拭いて、火鉢を入れて乾かすと云ふことにして居る。

それから身體の方では、冬などはいじけると遂に凍瘡などを拵へ易いものでございますから、朝起きると甲板などを洗ふ前に、ボートを漕いで船の周圍を廻らせる、所がそれも出來ないことがある、何故出來ないかと云ふと、氷點以下二十度三十度になると寒さの爲にボートを吊つてある綱が水がかゝらぬでも凍つて仕舞ツて、まるで棒のやうになつて仕舞ふ、無理にボートを卸さうとすると麻綱が直ぐ折れて仕舞ひますから、ウッカリ卸せない、さう云ふ時には仕方がないから總員を列ばして、さうして甲板の上を駈けさせる、大抵三十分から四十分ぐらゐ駈けさせる、さうすると汗ばんで來る、それから顏を洗ッて食事に就くと云ふ風にやッて居ります。

先づ大體さう云ふ風にして艦内の衛生の事はやッて居るのでありますが、幸ひの事には傳染病は少ない、先づ發しないのであります、今度の役などでは今日までに海軍だけの死傷者が千二百二十二人になつて居ります、其中即死が九百六十六人、それから傷が付いて死んだ者が十五人、生死不明の者が八十八人、是は御承知でございませう、第三回の閉塞に參りまして、それなり今日まで生死不明の者があります、それから全治した者が七十九人、入院中の者が八十五人、それから病院まで送り還されないで、各自の船やら或は其他適宜の所で療養をして居る者が八十九人、是は四月三十日の調でございます、死傷は斯の如く戰爭では多くございますが、病人の比較に至ると實に少ないのであります、一番多いのが百人に付てポイント九六でございます、百人に付て一人の割になつて居らない、丁度一萬人に付て九十六人の割でございます、それから少ない艦隊は一萬人に付

て四十三人でございます、實に少ないと私共は思ッて居る、所が茲に甚だ不思議な現象があるのは、昨年中の病人の平均を取りますると、百人に付て一人とポイント一の割合になッて居る、然るに戰爭になッてから減ッて居ると云ふのは、餘程研究すべき問題ではなからうかと私は思ッて居ります。

それは理由が二ツありはしまいか、一つは衞生が行屆くやうになりまして、さうして却て平時よりも戰爭になりましてから、水を供給する船も食料を供給する船も澤山あちらへ參ッて居りますから、さう云ふ點が矢張り病人の少なくなつた所以でもありませうか、今一ッは之を以て日本の軍隊の士氣の旺盛だと云ふ事を證明するに足りるであらうと思ひます、あなた方も御承知でございませう、相手になッて居ります露西亞の兵士は、無理に病氣になる者が屢々あると云ふ事を聞きました、それは戰鬪に出るのがいやで、無理に惡い物を澤山食べたり何かして腹下しをする者があり、或はいろ〳〵な事をやッて戰鬪に出ないやうにする、甚しいのになると人殺しをするとか、或は人を傷つけるとかして、犯罪をして牢へ入れられて、其爲に戰鬪に出ることを避けると云ふ兵士もあると云ふ事を聞きました、然るに我兵士は平常より病人の比較が少ないのは、是非戰鬪に臨んで華々しい働きをしたいと云ふ考が皆各自の頭にありますから、多少身體に故障があッても我慢をすると云ふ點もありませうし、又それに付ては非常に養生をする爲ではあるまいかと私は思ふのでございます、それで皆さん方も御承知でございませうが、石田三成が關ヶ原で破れてから後に捕へられて牢に入ッて居る時に、或時飮物が欲しくなッて給仕人が持つて出た所が、それは水であッた、其水を一口呑んだが吐出して、眞水は身體に中るからして湯を持つて來いと言つた、それを聞いて德川家の或る武士が、石田と云ふ男は馬鹿な奴だ、もう直きに首を斬られて仕舞ふのに何の爲に養生をするのだらうと言つて笑つた所が、三成は之を尻目に掛けて、大

丈夫の心汝等の知る所ではないと言つたと云ふが、是れ即ち日本武士のたしなみであらうかと思ひます、命が惜しいからと云ふので養生をするのではない、今死ぬと云ふ時までも健全なる精神を有ち、健全なる身躰を有つて、さうして出來得るだけ自分の職務を忠實に働かうと云ふ者から、身躰を非常に大切にするのであらうと私は思ふのでございます。

斯の如く身躰を大切にして又病人も少ない、其兵士が然らば命を惜しがるかと云ふ問題が起つて來るのです、所が少しも命を惜しがらない、御承知の通り三度行つた閉塞船のこと、此時にも募る度毎に應募者が増して來る、一番初めの時には二千人ばかり、其次に募つて見ると四千人になつて參り、三度目の時には殆ど全軍の半ばも願を出すと云ふ位の勢であつて、決して命を惜むが爲に養生をして居るのではないと云ふ事が分るのでございます、三十三年の北清事件の時に日本の軍隊が彼方へ參りました、是は陸戰隊が上りました、其時に各國からも上つて天津へ行つたので、其時一日に六里なら六里、七里なら七里と云ふ里數を定めて行軍をやつたのであります、すると彼方へ着きますると、露西亞の兵士とか或は英吉利の印度兵とか云ふのは、身の丈六尺も七尺もあつて、一個人の力を較べると日本兵より強い兵士である、それが疲れてガツカリして皆横になつて仕舞つた、其中で日本の兵士だけは、身長は小さいし力を較べたならば一個人の力は彼等より劣るかも知れないが、彼方へ着くと横になるどころではない、汗ばんだものを洗濯する者もあれば、破れた所を縫ふ者もあり、非常に働いて居るので、其爲に各國の兵士が大層驚いて居つたのです、是は事實でございます、是等は矢張り身躰が強壯だから出來るのであつて、いくら精神が張つて居らうがどうしやうが、身躰が弱いと七里なら七里の道を歩くとガツカリして倒れると云ふ風になつて仕舞ふ、所がさう云ふ風に働いたのは見得にやつた譯ではない、身躰が

勞れて居らない、無益に時間を費すのも詰らぬから、洗濯をしたり或は衣服の綻びをしたのである、之を以て見ても詰り身體が強壯でなければならぬと云ふ事が分るのであります。

それから食事の點でもさうです、日本の兵士と較べると佛蘭西の兵士などは中々奢つて居ります、日本の兵士は或る場合には結飯と澤庵、梅干ぐらゐを食つて平氣で働いて居る、所が彼方の者は肉を食はねと腹が空る、甚しいのはチョコレートまで持つて行かなければ戰爭が出來ないと云ふ事を言つて居る、あなた方は始終御馳走を食つて居るから惡く言ふのではないが、御馳走を食べたばかりで強壯になると云ふのではない、適宜の運動法、適宜の健康法を施さなければならぬのでございます、それでなければ健康になることは出來ぬ。

それからモウ一つは活氣を失はないやうにするのが必要であらうと思ひます、其例としては英吉利の皇帝の戴冠式、あの時には唯今御話をなされた土肥博士もおいてでしたが、土肥博士などは郵便船で御出になりましたから、十分樂をして御出になつたらうと思ひます、所が私共は軍艦で行つた、彼方へ行けば各國の軍艦が寄つて、技術の點なり操練の點なり競爭をしなければならぬ、其場合に後れを取つたら恥であるから途中で勉強して行かうと云ふので、むやみに操練をした、印度洋とか或はレッドシー(紅海)あたりは堪らぬです、船が歩いて居れば風は來るが、船を停めたら風などは來はしない、暑くつて堪らない、さう云ふ所で朝から夕まで操練をやつた、あなた方は御存知はございますまいが、操練で一番厄介なのは合戰準備であります、餘計なものは殘らず片付けて仕舞ふ、諸方に立てゝある鐵の柱でも、或は烟管の大きなやうなものが出て居りませう、總てさう云ふものは船の底の方へ片付けて仕舞ふ、それから太い麻繩を垂し掛けて、これを以て敵の彈丸の破裂したのを防ぐ、さう云ふやうに種々な事をやりますから、是は厄介でございます、平常ハ

本に居る時などは一週間に一度か二度位しか合戰準備をやらぬのです、所が彼方へ行くとさう云ふ操練もやるかも知れぬと云ふので、一日に三度もやつて三度元に復した、朝起きると直ぐ合戰準備をして、それから食事をしてこれを又元に復した、又午前に合戰準備をやつて、極く日中だけ休んで、夕方元に復して夕食事が濟んで又やつて又元に復す、さう云ふ事をやつた、さう云ふ時に病氣になる人があるかと云ふと、それで殆ど病人が無かつた、之を以て見ても身躰を規則立つて動かして生活をして行けば、寒暑に對しても割合に凌ぎよくなる、從つて是が衛生法の一つであらうと云ふ事を御話して置きます衛生法の事は其位にしまして、詰り平生衛生を心掛けて居る兵士が、イザと云ふ時には如何に强壯な身躰を以て、如何に强健の精神を以て働いたかと云ふことを御話します、併し是も悉く御話をしたら大層長くなるし、且又是まで御婦人の會へ出てお話をしたことはモウ十遍足らずやつて居ると私は思つて居りますから、恐らくは此中に幾度も御聽きになつた御方があると思ひます、或は初めて御聽きになる御方が多いか知らぬが、御話をする方で幾度も同じ事を繰返して言ふのは何だか氣乘のせぬことでございますから、今日はまだ新聞にも出て居らぬ事で、又今まで何處でも御話をしない事を申さうと思ひます。

それは第二回と第三回の閉塞の時の逸事を一つ二つ御話をしやうと思ふ、是が矢張り强壯なる身躰の賜物であると云ふ例になる、此事を御話するにはどうしても旅順の圖を描いて御話をしなければ分りませぬ。(圖解)此處が旅順の口で、左側に在るのが黄金山の砲臺、右側に在るのが威遠砲臺、其他いろ〳〵ありますが、近くのは此位な砲臺であります、此口を塞いで仕舞はうと云ふ、之を前後三回やつたのでございます、初めの時には十分にいきませぬて、僅に二艘の船が口元まで行つた、二度目の時には略々成功せんとして僅に間隙を遺した、二度目の時には

斯う云ふ風になつた。(圖解)千代丸に福井丸、彌彦丸、米山丸と斯うなつた、此米山丸がモウ少し中央へ來ると丁度宜い所へ行つたのでありますが、不幸にして中央まで來た時に敵から發つた彈の爲に蒸汽の鑵を破られて蒸汽が漏れた、それで船を急に停めて後方へ退らうとしたがそれが利かなかつた、あなた方が駈けて來て急に身體を停めやうと思つても中々停らないと同じことて、一萬噸以上の船が走つて居る時には、機械を停めてもそれから確に三海里ぐらゐは惰力でもつて進むものです、さう云ふ時には仕方がありませぬから後進を掛けて後方へ退つて、自分の思ふ位置に停まる、斯う云ふのが船を扱ふ方法です、所が此時には丁度宜い所へ船が來ましたから、停めて後進を掛けやうと思つた所が、今御話する通り敵の砲臺から擊つた彈丸が生憎鑵を破つたものでございますから、蒸汽が漏れて停めても旨く停らず、况んや後方に退ることは出來なかつた、仕方がないから錨を二挺打込んだ、けれども二挺の錨を引きつゝ船は左方へ寄つて仕舞つて此間へ沈めることになつたのでございます、此米山丸と云ふ即ち一番好位置まで行つた船を指揮して居つた正木大尉と云ふ人から、私の所へ寄越した手紙の中に當時の事が書いてありますが、其中に斯う云ふ事が言つてある「十人の機關兵は二直になつて一晝夜半、二人の兵曹は二人交る〳〵舵を執りて一晝夜半働き續けた而して自分等が運送船に乘移つた時は殆ど運送船の中を住ひにして、旅順の口へ向つて進みつゝ行つた」、其時には澤山の兵士を乘せて行くのではございませぬから、四時間起きては四時間寢ると云ふやうに交代して二直でやつて行つた、其二直の非番直に當つた者には成るべく休んで居れと云ふことを言付けた、然るに其時に休まないで種々の仕事をしたり、又マントレットを造つて居る、此マントレットと云ふのは前に御話しました彈丸を防ぐ楯です。夫れは丸太なら丸太を船の中へ横へて、是から非常に大きな網を丁度繩暖簾のやうに垂し掛けて、之に

細い綱をからげたものを幾つも船の中へ拵へる、さうして敵の彈丸が破裂をしても、此爲に防げて割合に怪我をする者が少ない、それを皆造つて居つた、そこで指揮官が何故お前方は休まぬか、是から非常に働きをするのであるから、休み得るだけは身體を休めて置く方が宜いぞと言聞けた、所が何と言つて兵士が答へたか、私共は代り合つて休めますが、指揮官は始終艦橋即ち號令を掛ける所に上つておいでになるではありませぬか、あなたが御休みなさらないのに私共がどうして晝寢などが出來ませうと言つて答へた、さうすると指揮官が、それはいけない、自分は船の上に居るが、先に行く船を見失はないだけの役である、別に身體を動かすと云ふことはしない、お前方は非常な勞力をやるのであるから、成るべく身體を休めろと言つたが、一人も休んだ者が無かつたと云ふので、大いに感じて來て居る、是も能く考へて見ると、若し中に身體の弱い者があつたら、幾ら我慢をしても、指揮官が始終起きて居るから自分等も起きて居て働かなければならぬと思つても、身體が弱かつたら是は出來ない、故に是も平常の衛生が行届いて身體が強健であるから、四時間働いてあとの四時間休む時間にも續いて働くことが出來ると思ふのであります。(中略)

それから尚ほ氷山丸に付ての話があります、是は新聞にも出しましたから御覽の方もありませうが、此氷山丸に機關砲を一つ載せて居つた、機關砲と云ふのは小さき鐵砲を四つ列べて、一つの機械に附けてある、其上に箱を載せて箱の中には彈丸が澤山入つて居る、さうして手が付いて居つて、此手を前後すると彈丸が澤山に發出せる、併し是は今さら効力が無いと云ふので餘り用ひて居りませぬが、兎に角敵の港に向つて進んで行くのであるから、少しでも敵に損害を與へるのが利益であると云ふので之を載せて置いたが、此鐵砲を發する役に連れて行つた一人の下士官がある。此事は教育の會などへ行つても能く御話をしますが、殊に御婦人の御方に聽いて戴き

たい、それは兵士の擧動である、士官はさう注意をして戴かないても宜いと思ふ、何故と云ふに特別に學校へ入つて種々の訓練を受けて出て來たのでありますが、兵士の方はいきなり飛込んで來る、此頃毎晩のやうに澤山提燈行列にやつて來ますが、殊に一昨々日（六月一日）でありましたか、日本橋の魚市場の人達が晝間旗行列でやつて來ました、それを私共が見て居りますと、半被を着た人もあれば、或は白足袋の跣足の兩肌の人も居れば、或は麥藁帽子を被つて居る人もあり、いろ〳〵の人が來たが、それを見て一種の感に打たれた、あゝやつて魚賣をして居られ、或は八百屋をして居られる人が、一と度軍隊に入つた三箇月なり四箇月なりの訓練を受けると、即ち今新聞に出て居つたり或は公報で見る如き立派な擧動をするのであつて、即ち兵士の擧動と云ふものは直ちに國民の觀念を代表して居るのです、士官の方は特別の教育を受けて居りますが、詰り兵士の立派であると云ふのは、即ち其國民の觀念が立派であるからの爲であらうと思ひます、特に國民の平素の擧動と云ふものは、是から家庭教育の主人公となられる御婦人の御方は能く御注意を願ひたいと思つて居ります。それで今御話を仕掛けた米山丸に連れて行つた下士官は平生極めておとなしい男でございます、それであるから所謂人の強懦、即ち彼人は強いとか或は弱いとか云ふやうな事は輕々しく批評の出來るものではないと思ふ、其人が死を決して其處に臨んだ時の觀念と云ふものは、なか〳〵其位置に臨まない人がチョット位考へて批評の下し得るものではないと思ふのである、其米山丸へ連れて行つた下士官と云ふのは、平常一同から「女々」と言はれて居つた、殊に艦内第一の親孝行と云ふ評判の男であつた、それに正木と云ふ指揮官が目を着けて、それを撰抜して特に一番困難な鐵砲を擊つ役を言付けた、それで愈々港の口へ近づいて、是から鐵砲を擊ち始めろと云ふ號令を掛けて、其擊つ時の樣子を見て居ると、少しも慌てることなく平常の通り沈着

の態度を保つて居るが、其勢ひは夜叉の如き有様を現はして撃つたさうです、其撃ちて居ります中に敵から放つた彈丸が破裂をして、兩方の足と腕と三箇所撃たれた、それでも屈せずにやつた居つた、其中に敵の彈丸が罐に當つて中の蒸氣が漏つて、旨い工合の所へ船が行かないから、錨を急に投込まなければならぬので、指揮官は其男に向ひ、お前は鐵砲を止めて錨を投込めと云ふことを命じた「ハイと言つて錨を投込んだ、さうすると其次に水の深さを測れと言付けた、それは幾らの深さであつたと云ふことを指揮官が知つて居らねば、其閉塞は果して旨く行つたかどうかと云ふことが分らない、深過ぎる所でやつたならばそれだけの効力は無い、それで船を沈める所の深さを測れと云ふことを言付けた、是などは餘程落付いて居らなければ出來ない事であります、然るに其兵士はチヤンと深さを測つて錨を投込んだと報告を爲し、端艇に乘つて出やうとする時に、敵の彈丸が飛んで來て、左の頸部を撃たれた、丁度合せて四箇所の傷を負つた、それにも拘らず遂に擢を取つて五海里の間漕ぎ通して收容船に收容された、收容されてから後は殆ど一時絶息したさうでありますけれども、是は仕方がない話で、四箇所も傷を負つて居るのである、是等は身體が強壮でなければ、幾ら精神が強くつても身體は續かぬです、それで正木と云ふ指揮官が大層感心をして、昔の人が忠臣を求むるは孝子の門に於てすと云ふ事を言つたが、實に此言葉は自分を欺かなかつたと云ふ事を言つて居ります、さう云ふ立派な擧動をした下士官があるのです。

それからモウ一つは其米山丸に乘つて居りました信號兵です、信號兵と云ふのは指揮官の側に始終附いて居て、さうして指揮官の號令を傳へたり、或は旗を揚げたりする役である、此者に正木と云ふ指揮官が面白い事を命じた、それは船が沈没するまでに敵の彈丸が幾つ當るか勘定をして見ろと言付けた、何故さう云ふ事を言付けたかと云ふに、若し生きて再

び艦隊に還ることが出來た時には非常に大いなる參考になる、何時間の間に敵の彈丸が幾ら當つたと云ふことが分ると大いなる參考になる、それで其信號兵は彈丸が一つ當ると一つ、二つ當ると二つと勘定をして、港の口へ行つた時に三十九發まで勘定をした、さうするとモウ港の口では諸方から來る彈丸が當りますから勘定がしきれなくなつた、そこで指揮官に向つて、モウ確かな勘定は出來ませぬ、三十九發までは勘定をしましたが、それから先は百發當つたか百五十發當つたか勘定は出來ませぬと言つた、其途端に敵から來た彈丸で右の足を擊たれましたが、左程ひどい傷ではなかつた、所が其側に居つた中尉が重傷を負つて倒れた、すると其信號兵は自分の足に傷を負いて居るのも打忘れて、其重傷を負ふた士官を抱上げて高い所から下へ降りたのです、下へ降りてそれを正木大尉に渡し、正木大尉はそれを抱えて端艇の中へ乘移つたのであります、是などは何でもないやうでありますけれども、日本の兵士が如何に高尙な觀念を有つて居るかと云ふことが分るのです、自分が傷を負つて居るのも忘れて、自分の上に立つて居る士官の身を大切に思つて、其己れの身の危いことなどは顧みず、それを抱えて下まで降りると云ふのは、所謂日本國民が如何にも高尙な觀念を有つて居ると云ふことを證據立てると思ひます。

其次に第三回閉塞の御話をしますが、是は皆さんも御承知の通り實に悲慘な狀況を呈したのです、八艘行きました船の中途に四艘は一人も戾つて來ないのです、即ち前に申す通り生死不明の者が八十八人ある位ですから、是が一番ひどい有様を呈したのです、此時の御話をします。(圖解) 此前の時には斯う云ふ風にやりましたが、三度目の時には米山丸などの沈んだ所へ防材と云ふものを敷いた、防材と云ふのは船が入つて行けないやうに彼方でもつて遮りを置くのです、それはどう云ふ事をするかと云ふと、是にも種々式がありますが、多くは二間三間ぐらゐの丸

太を列べるのです、そうして三通り位穴を開けて、細い針金を以て絢つた太い鎖を之に通ずるのです、さうして其上を又太い麻綱でからげて、諸所へ錨を投込んで保たしてある、さう云ふものを此處へ置いた、所で其夜は南風が强く吹いて居つた、南と云ふと沖の方から港の口に向つて風が吹く、さうして非常に波浪が高いからして、此時閉塞をやつても還つて來ることが出來まいと云ふ懸念からして、其時の指揮官が之を中止しやうとしましたけれども、命令が屆かずして遂に行ふことになつて仕舞つたのです、其時に一番先に行つたのが三河丸と云ふ船で、是は二箇所の防材を突破つて中へ入つて仕舞つた、それから其次に遠江丸と云ふのが進んで行つて、防材に突掛つて横に曲つたらしい、それから小樽丸に江戸丸、佐倉丸と云ふのが此處に列んで、此處に朝顏丸と云ふのがあつて、少し離れた所に仁川丸と云ふのがある、斯う云ふ風になつた、併し是は私の想像です、新聞にも出して置きましたが、新聞のも想像です、何故想像かと云ふと、此小樽丸と相模丸と佐倉丸と朝顏丸と云ふ此四艘は一人も還つて來ない、それ故何處々々へ沈めたと云ふことが分る筈はない、唯是は其時に行つた他の船の人から聞いたのと、あとで種々の方面から來る報告を湊合して見て、こんな風ではあるまいかと私が唯考へただけでありまして、實際の事は分りませぬ、併し此四艘の人は一人も歸つて來ないのです、それで其時に一番奥へ入りまして三河丸を指揮して居つた匝瑳と云ふ人が寄越した書面があります、之を見れば閉塞の如何に困難であつたかと云ふ事が分りますから、之を讀んで見ませう(中畧)三河丸は一番先に行つたものであるけれども、乘つて居る當人は其當時知らない、自分の船が先に居るか後に居るか分らない、所が港の口で鐵砲の音が始まつた、それはあとから考へると收容しに行つた驅逐艦に敵の砲臺から撃つた彈丸ですが、それを他の運送船が最早入つたと思つたのです、即ち三河丸に乘つて居る匝瑳と云ふ人がさう考

へた、そこで自分の船も行かうと思つて港の口に向ふと、此時に、

「恰も味方水雷艇の來るに會ひたれば、閉塞船は港口に沈みたるやと尋ねしに、汝は先發第一なるぞシツカリやれと云ふ答を得たり、……（中畧）

斯う云ふ事が書いてある、匝瑳と云ふ大尉が傍らへ信號兵を呼んで、（前に御話をしたのとは別の、他の信號兵です）、愈々近くなつたら其處で投錨をしろ、爆發をしろと云ふ事を言付けるが爲に、口へ「メカホン」と云ふ遠方へ聲をやる器械を付けさせて居つた、さうして呼子の笛を挾んで肩へ手を掛けて居ると、何か拇指の頭へ當つたやうな氣持がしたと云ふ、すると側に居た信號兵が、航海長やられたと言つて倒れた、見ると自分の笛の口を彈丸が曲げて咽喉を貫いたのです、立派な兵士であつたが惜しいことにやられた、即ち一言を紀念に遺して遂に斯う云ふ最期を遂げたのは氣の毒であると云ふ事が書いてありましたが、併し此時に非常に幸ひな事があつた、何故かと云ふと此三河丸が防材に向つて突込んで行く時に、諸方から撃つ彈丸が彈丸の天井を造つたと云ふ程に澤山撃つた、彼方も今度は防材を敷設し、砲臺からは盛んに撃つし、其外水雷が敷設してあつた、それが幾つも破裂するので其水が船體に當るから、彈丸の爲に起つた火が其水の爲に消えて仕舞つた、斯う云ふ事を以ても水雷と彈丸の爲に如何に苦しんだかと云ふことが分るのであります、其處の事が書いてあります。（未完）

家庭看護法（つゞき）

醫學博士　三宅秀君口述

今日も亦前回の續きでございまして、病人を寢室から他の所へ移しまする方法のお話であります、先づ其續きをお話する前に一の注意を申して置きませう。

それは病人を他所に移さうと思ひまする時は道筋の

檢分を先にして置くと云ふことの注意であります、此注意がございませぬと云ふと不都合が間々起る、例へば病人を浴場へ伴れて行くときならば浴場と云ふ先の見當は付いて居りますけれども、浴場まで參ります所の途中に狹い場所などがありまして、二人三人掛つて病人を運んで參りましても丁度其狹い所へ掛つて行き支へて仕舞ひます、それには斯う廻つて斯う往つてと云ふやうなことをちやんと通る路を豫め見定めて置きませぬと云ふと、病人を病床から抱上げてさうして伴れて行きまして、さて曲り角の所へ往いて行き支へて仕舞つて復た元へ戻つて來なければならぬとか、或は途中に邪魔な道具でも差し出てある箪笥があるとか火鉢があるとか云ふやうな場合でありますれば其場に臨んで取除けることも出來ますけれども、廊下などの狹い所で、病人を寢た儘抱へて行つて、さて其曲り角を通ることが出來ぬと云ふやうなことになりますと、十分風呂に入れると云ふ方の準備は致しましても、道筋の差支の爲に其目的を達することが出來ませぬ、又病人を湯殿へ伴れて行くことの出來ない爲に湯に入れることが出來ないと云ふやうな結果を來しますから只一例でございますけれどもさう云ふ注意を前以てお話するのであります、若し狹い道路でありまして、右廻りに廻ることは出來ないが左廻りに廻つて行けば其通路を通り拔けることが出來ると云ふやうな場所でありますならば、豫め病人を抱起す前にそれだけの手筈をして掛らなければなりませぬ、例へば右の方を頭に致して、病人の寢て居りまするのを寢床の右側の方へ看病人が之を抱上げて二三人掛つて抱上げて伴れて行きますのと丁度反對で、寢床の向側の方へ看病人が立つて病床の右側から病人を抱上げて運ぶのとは其目的地まで運んで行く所の道路の工合に依つて右或は左に抱き上げると云ふやうな工合に看病人の位地が變つて來るのでありますから、さう云ふことの毫も考慮なしに連れて行くと看病人の身體が邪魔になつて詰り目的を達することが出來ぬやう

になることがありますから、何處の場所へ何をする爲に伴れて行くと云ふことの目的が決つた以上は、運びまする所の路筋を能く下檢分をして、差支ないやうにして後に病人を起し初めなければなりませぬ、聊かの注意でありますけれどもさう云ふ注意が足りませぬと云ふと思ふだけのことを遂げられないやうな場合があります。

それから病人を抱起して行きまするのに、日本流の蒲團の上て寢て居りまする病人、又は卒倒して土間や板の間の上に倒れて居りまする病人などを抱上げますることは西洋流の臥床の上に寢て居ります者を抱上げますのよりは少し骨が折れます、何故かとなれば看病人が低く踞んで坐るやうに致して膝を屈つて抱上げるのでありますから腰をきる時には大に骨が折れます、寢臺の上に寢て居りまするものならば僅かに腰をかゞめるだけて病人を抱起すことが出來ますから、最初から看病人が腰を聊か計り屈めて半伸しに伸ばして居りますから宜しいけれども、日本流では低い蒲團の上に臥て居るのでありますから、之を臥た儘抱へる時は看病人が踞いて抱上げなければなりませぬ其爲め至て抱上げ惡うございます、不時に起つたことならば致方もありませぬが、永く臥て居ります病人などでありますと、是まで再三申しました通り低く蒲團の上に臥て居りますのは何かに付けて不自由勝ちであります、どうしても此場合には西洋流の寢臺の上に臥て居ります方が種々な點に於て利益がありますから其方をお勸め致すのであります。

此前には病人を抱へて行きますのに重に病人を臥かした儘病人の臥た儘て蒲團と共に運ぶか或は蒲團が無くとも倒れて臥て居る處を其儘て運ぶことを主にお話致しましたけれども、若しさうでございませぬ時分には、病人を、丁度椅子に腰を掛けさしたやうな工合にして連れて歩く方法があります、是れはどう致しても二人の看病者が必要であります、極く容易い方法は看病者が二人向ひ合ひまして、さうして

看病人の一方の人の左の手を他方の看病人の右の肩に掛け、此方の右の手を彼方の看病人の左の肩へ掛けますと、丁度椅子にある倚靠のやうな形が出來ます、それから此方の看病人の左の手を此處（對手の帶の邊を指す）へやり、亦彼方の人も左の手を此處（前に同じ）へやりますと丁度椅子の坐面のやうなものが出來ますから容易く病人を腰を掛けさせて運ぶことが出來ます、病人に依りますと云ふと抱きすくめて運ばれるよりはさう云ふ工合に起直つて寄掛つて居るやうな工合にして運ばれる方が樂であると云ふて其方を喜ぶ人もあります。

それから今一つの方法は此椅子の寄掛りのやうなものを無しに致しまして坐面だけを拵へてそれへ腰を掛けさせて病人を運ぶことが出來ます、是はよく子供が戯れにすることでありますが、御輿樣とか稱へまして、私が看病人でありますと斯う云ふ風に（右の手にて左の腕の半を摑み）致しまして、對手方も矢張り斯う云ふ風に致しますと丁度四角な椅子の坐面のやうなもの、石田菱のやうなものが出來ます、其上に腰を掛けさせて運ぶのであります、或は看病人の腕で致しますと看病人の腕が痛みましてそれに堪えぬやうなこともあります、其場合には腕の代りに此位な普通用ゐまする二枚開きにして腰を掛けます床机があります、其儘坐面に當たる布切があります、丁度それだけを用ゐて、其上へ病人を腰掛けさして、さうして四隅の所を二人で持つて病人を運びますと云ふとそれでも運ぶことが出來ます、兎角病院內では病人を運ぶのに、軍人の使用ひまする大きい擔架のやうな物を以て運びまするのが常になつて居りますけれども廣い所ではそれが宜しうございます、或は病院とか又は家の外とか云ふやうな所では三尺の長さでも五尺の長さでも差支なく用ゆることも出來ますけれども、それが私宅の內でやつて見ると全くさう云ふやうな器械なしにやるので、若し用ゆるならば極く短かき擔架のやうな物で、漸く一尺四方位なもので病人を運ぶことに致して置きませぬ

と彼方此方と擔架が支へまはつて目的の所まで運ぶことが出來ませぬ、殊に普通ありまする擔架は提げる柄が長うございますから柄が邪魔になりまして、狹い所に什具の置いてありまする所の角などを曲りまする時分には道具に支へたり柱に支へたりして、家の中では柄の長い擔架は總て用ひられないのであります、ちよつと此間新聞に出て居りましたが、此度の事變で海軍の艦で負傷を致しました者を運びます擔架が時事新報に二通り程出て居つたと思ひまするが、一は戸塚軍醫の發明だらうでありますが、帆木綿で幅の廣い長い物を拵へて置きまして其外へ竹の簾のやうな物を取付けてあります、帆木綿と簾とが一緒に取付いてありますから、要らぬ時分にはグル〱ッと捲いて置いて、使ふ時分には帆木綿の上に病人を載せて運ぶのであります、是には長さ何尺かの柄を箝めますが、其柄の長さはちよつと書いてなかつたやうであります、海軍の方で使用つて居ります擔架の類は陸軍の方で使ひまするのと違つて必ず家の中の看病法に使用することが出來るだらうと思ひます、何故かとなれば艦の中は矢張り狹い所でありますし、それから艦の甲板で負傷さした者を醫官の療治して居る手術室まで運ぶには多少階子段の運び下りもしなければならぬやうな譯でありますから、それ故に陸軍の野戰に於て負傷した者を運ぶやうな大きな物でなくて餘程簡便だらうと思ひます、今一つのは此度實施に用ゐられてありまして至極好かつたとか云ひまするのは海軍の鈴木軍醫の慥か發明のやうに書いてありましたやうです、是は丈夫な木綿の布切を二巾取つて中程の處を縫合せて前後の兩端を縫合せずに置き隅違ひに向ふの隅と此方の隅を結び合はして二ヶ所の結び目の所を風呂敷包、みを頸へ掛けたやうな工合にして兩方の看病人が頸へ掛けますと縫ひ合せた處は丁度狹い風呂敷を廣げた如くになる其風呂敷の中のやうになつた所へ病人或は負傷者に腰掛けさせます又一人の右腕と他人の左腕にて病者を抱擁する、斯う致しますると看病人

二人掛りでありましても、先刻申したやうな工合に看病人が右の手と左の手を以て倚掛代りに使つて仕舞つたり、又坐面のやうな形にすると全く兩手を使ふことが出來ませぬけれども、之が布切で出來て居りますと病人の身體の重量は風呂敷の結び目で頸に吊下るやうな工合にしてあるから頸で支へて仕舞ひます、一方の人は左腕を自由に使ふことが出來他方の人は右の腕を自由に使ふことが出來ると云ふやうな譯で階子の昇降をするなどには至極便利ださうでございます、突張つて居りませぬ長い柄の付かない風呂敷のやうなもので運ぶことが出來ますれば病人を湯殿とか雪隱へ運ぶとか云ふ場合には誠に好からうと思ふのであります、此軍事上に使ふ看病道具が平時に當つて全く用ゐにならぬものではありませぬ、都合の好いものであつたならば互に用ゐて宜いものでありますから、何でも良いものが新聞にても出て居つたら皆さん鍛念に能くさう云ふものは拵へ方や何かも書拔いて置く位に心掛けて戴きたいのであります、僅かに一度か二度病人を動かしまするには右の如き器具を豫め拵へて備へて置く必要はありませぬけれども、永い病人になりますと云ふと之を用ゐる場合が度々ありますからして、其都度大變手數がかゝらんで、病人を誤つて取り落したりなどすることの無いやうに安全にして、病人も安樂に擔架の上で擔はれて行かれるやうな器具を拵へて置くことは必要であります、

私は此處へ圖も何も持つて來ませぬから或は皆さんにお解りにならぬかも知れませぬけれども病院或は陸軍などで使つて居ります大きい擔架で日除けの附きました羽衣付の擔架があります、斯う云ふ長病の人が家に出來ましたる時分には隨分備へて置いて宜からうと思ひます、それは何かと云ふと、寒くない快い氣候の日に病室から其擔架へ病人を移して、庭前などへ抱へて行つてさうして其儘庭の中へをろして暫時の間良い空氣を好い眺望とを見て心を慰めるのであります、此場合には手たの布切で拵へた擔

架てはいけませぬから、無論此の四隅に坭臺のやうなものが付いて居りましてさうして庭などへ置くことの出來るやうに致して置かなければなりませぬ、それから餘り日光が當つて眩しいやうではいけませぬから日除付になつて居ります、丁度薄い日陰にしてさうして長い間一時間でも二時間でも病人を庭へ出して置けるやうなもので、先づ申さば子供を載せて置きます乳母車のやうな形に拵へたものが必要になつて來るのであります、是等は病人を運搬する器械と言ふよりは寧ろ換へ臥床のやうなもので、病室の中の臥床の代りに用ゆる寢臺と云ふやうな理屈の物であります、さう云ふものも必要な場合がありま
す。

日本では總て斯う云ふやうな病人に快樂を與へる樣な看病法が昔から發達して居りませぬので、それが爲にさう云ふ便利な都合の好い物は世の中に無いやうに心得て居るのでありますから、不自由を忍んで居るのではない實際にそんな都合の好い患者に愉快を與へ之を慰める方法は無いものと思つて人が知らずに居つたのである、併し現今歐羅巴邊りてはだん〳〵此事に就て研究して居りますからして、永い病人が出來ますれば其餘命のありまする間に親切に病人に待つて愉快を與へ慰撫して置きます、病人程面白くないものはない、終日クヨ〳〵と自分の病氣のことばかりを苦に惱みて居りますから、自然精神が變つて參りまして頑固になりましたり、愚知を述べたり強情になつたり、難題を排べたり分らない我儘を言つたりするやうなことになつて來ます、それはどうかと言ふと全く精神を慰める所が無いからでありますから、其等の病人に向つては本病を癒すと云ふよりは精神に僻みを生じないやうに、我儘を生じないやうに、安樂になるやうにしなければならぬのでありますから、何の方面へ向いては屆くだけ其病人を慰めるやうにしなければなりませぬ、それ故臥床にも換臥床と云ふやうなものを拵へて野田の寢臺のやうなものまでも備へなければならぬのでありま

す、それが先づ病人の運搬器の一つ換寢臺の出來た出來てございます、是から病人を遠くへ運んで行きまするお話に移ります。

（未定）

寄書

所謂肺病藥「田うてぎ」に就て

（不賛成説）

醫學士　竹中成憲

近來「田うてぎ」なるもの世に肺病の藥なりとて賞用せらる其初めて俗話に上るや素より醫師側に於ては一顧の價値なきものと冷視したるに相違なきも一犬吠形百犬吠聲とは此事を云ふならむ圖らず有力なる印刷物の之に賛同するものあるに至れり故に巳を得ず一夕の閑を偸みて一言する事とせり。

「田うてぎ」は學名「ビデンス」にして本草綱目の「狼把草」たるは實なり之に類するもの左の如し。

一　ヤナギタウコギ
一　ホソバノセンダングサ
一　センダングサ又キツネバリ（鬼鍼草）
一　シロバノセンダングサ

右の中「ヤナギ、タウゴキ」は實に藥用に供するものにして生藥を「ヘルバー、ビデンチス、アクアチツエ」と云ふ（ビデンス）とは羅典語にして「二齒」といふ事）獨逸俗稱「ツワイ、ツアーン、クラウト」（二齒草と云ふ意）菊科に屬し歐洲にも産し結石病に用ゆ其成分は單寧、エーテル油及び植物粘液なりとす。

以上成分の中、醫の採て以て効用を期するものは植物粘液の吾人の粘膜に多少緩和的作用ありとするも主なるものは單寧及びエーテル油なり。

單寧の醫治効用は頗る廣く今肺結核に關係するものを案ずるに左の如し。

第一　健胃劑となる事
第二　盜汗を止むる爲めに古來用ひたる事

第三　出血を止むる爲めに古來之を外用するは勿論内服し咯血にも之を用ひたる事

第四　下痢を止むる爲めには今日の醫學に於ても欠くべからざる藥品たる事

第五　糖尿病の藥品たる事

以上は古來不變の定則にして健胃劑の肺結核に必要なる止汗、止血、止下皆共に同病の對症療法として應用すべきもの又糖尿病の末期が多く肺結核に終るを思へば第五の理由を以て單寧を肺結核の豫備藥と爲し差支なきなり。

宜べなるかな單寧は最も古き肺病藥なりコルネット氏結核論五三三頁化學的藥劑の第一席に氏之を記述す予昨年「應用肺結核療法」を公にするに當り之を左の如く譯出せり。

本品は結核の最も古き藥劑の一にして千七百年代には盛に用ゐられたり近代之を賞用せるはウォアリエ氏にして千八百六十三年(文久三年)なりレーモン、アルトー兩氏は動物試驗の結果之を人類に應用し結核進行中止及び輕快を報告せり其他デ、シェーガー、ウイチデマルコの諸氏同一

コルネット氏は動物試驗に因り効果を認めず(處方二例附記)

上記の論文は佛、英、獨語にて現はれ居れり(書名今略之)

然らば「單寧」が古き肺病藥であつて「田うこぎ」が「單寧」を含む以上は敢て不思儀の事にあらず。

尙ほ上記成分の一なるエーテル油は總て呼吸器病就中「痰」を以て來るものゝ萬病藥たる以上は益々本品の本病に賞用されて差支なきに似たり然れども肺病藥は予の集めたるものゝみすら殆ど三百種あり而して肺結核の療法は隔離、營養を主とし藥品を第二位に置く事若し藥品を用ゆるならばクレオソートが一番宜しからむと迄煎じ詰め來りたる此二十世紀に於て古の昔の「單寧」に逆戾りするとは洵に沒理的の骨頂なりとす。

本品使用の由來が明白にして山師的にあらずと爲す

所以のものは只此草が松平子爵の所有地に生じ居たると其近傍の筧元大審院判事が共に培養に勉めたると或日來りたる一人の年寄が之を所望したるの三事あるのみ此年寄が洋の東西大家が數百年間に數百種の藥を求めたる以上のものを知れりとすれば學者の顏色土の如しと謂ふべし。

（完）

●死亡せる產蓐熱患者の實驗●●●●●●●●●●●

普通獨逸助產婦新聞譯載

新潟支會顧問　高橋辰五郎君

本年七月二十二日余は年齡二十七なる第三回の產婦に招がる產婦は强壯にして健康なり余は自己及び產婦の嚴重なる消毒をなし檢査を施こし第二頭蓋位なるを診定せり午後九時に至り强壯なる女兒を產し半時間の後ち後產全く產出す分娩前に體溫三十七度一分脈搏八十至を算す分娩後二時間にして產蓐婦は不快を訴へて嘔吐を發す依て余は直ちに醫師を聘せるに即時に來診せられ服藥を命じ間も無く其効を奏し不快嘔吐共に消散し翌朝に至り蓐婦は爽快活潑を訴ふ。

	朝體溫	脈搏	午後體溫	脈搏
六月二十三日	三六、八	八〇	三六、四	八〇
二十四日	三七、〇	八四	三六、八	八四
二十五日	三七、二	一〇〇	—	—

此朝、余が脈搏檢査の際、卒然、子癇樣の發作を現はせるにより余は直ちに隣室の婦人を呼び醫師の許に送り醫師は時を移さずして來着し處置せるに再び發作を來すことなかりき同二十五日十一時體溫三十七度四分脈搏九十六午後四時三十七度五分脈搏九十二同八時體溫三十七度二分脈搏九十二

	朝體溫	脈搏	午後體溫	脈搏
二十六日	三七、二	九六	三七、〇	八八
二十七日	三七、六	九六	三七、四	九二
二十八日	三七、二	八八	三七、〇	八四
二十九日	三七、〇	九二	三七、二	八八
三十日	三七、四	九二	—	—
七月一日	三七、八	一〇〇	—	—

余は婦人が少しも疼痛なく且つ快安なるを確認せり

殊に終りの二三日間は余の制止に係らず時々臥床を離れ且つ家事を營み加之七月一日には豫じめ醫師の認許を得て轉宅をなせり但し醫師は殆んと毎日婦人を訪はれたりき七月二日朝余は婦人を其新宅に訪へるに体溫卅八度二分脉搏百四なるを見たり依て余は嚴に臥床を離るゝことを禁じ且つ直ちに使を以て醫師に婦人の狀を報じ且つ來診せんことを求め醫師は來りて余の所見を確認せり七月三日余は他の分娩の爲めに妨げられて婦人を訪ふことなく翌四日午後醫師來診せるに体溫三十九度二分なるを見たりと而して醫師は更に內診を行ひるに毫も異常を發見せず故に產褥熱なる可しとなさざりき此の如く体溫甚だ高かりしが爲めに余は婦人を訪ふことなく唯毎日其狀態の報知を得たり七月六日醫師は其產褥熱なるを診定し同十日夜患婦は遂に死亡せり小兒は健康にして最初十二日間は母乳を得たり余は規則によりて分娩の記事と体溫表とを添ひて死亡屆書を王國縣醫に提出し且つ患婦の產褥經過を最も精密に說明せるに記事体溫表及び口述と醫師の報告とを對照せられ縣醫貴下は該婦人の疾病及び死亡に就き余は一も其罪を有せざることを告られ且つ毎常助產婦は成規によりて處置し殊に今回の如き場合に際しては必ず適當の時期に醫師を招く可きを諭告せられたり而して余は此前後共に業務を休止するを要せずして他の分娩の處置をなすことを得たり。

事情此の如くなりと雖ども余は他の同業助產婦の利己心より今回の事を以て余の不親切より出でたるものなりと日々に吹聽せられたり然れども余は充分に自己の任務を盡せるを以て自から慰むるものなり。

●胃癌と白屈菜

N　N

胃癌に白屈菜の特効ありとの事は近頃の事ですが余の知人は胃癌に罹り栗本博士の治療を受けて白屈菜の効能を實驗致しましたから素人的に觀察したることを記述致しましやう。

年齡六十歲の男子にして平素は至つて壯健でしたが

フト胸がつかへる〳〵と云ふ事が初りました早速醫者の診察を受けましたが凡そ二ヶ月ばかりは普通の胃病位だろうと思ッて居りましたが段々食慾が減じて往きまして疲勞が追々增す樣になり凡半年許りもたちて體量を秤りましたら健康の時代の半分になッて七ヶ月位からは食事をしますとお腹がグウー〳〵と鳴りまして食物を突き歸へすことがあります此時には一時間も休んで又少しつゝ食事をする樣にしましたが食量は迚も平常の半分位しら用ゐることは出來ませんロには白き透明の粘液が溜りて出る樣になりましたが是れは醫者の投劑によッて一時出ぬ樣にはなッた氣分はます〳〵惡くなり疲勞も又加はりて九ヶ月目頃よりはチク〳〵胃部に疼痛を覺え同時に舌のツル樣な工合で語尾明かならず俗に云ふ舌足らずとなり胃部の疼痛はノベツではないが二日痛むと一日は稍々薄く又は三日痛みて一日薄く、痛む時間は一時間に三四回位で十ヶ月頃よりは胃部に塊が出來ました初め北村醫學士の診斷を受け次に入澤博士の診斷を受けましたが此時は最早二錢銅貨大ての塊となりまして立派な胃癌と宣告をされた栗本博士は白屈菜なる新藥に就き紅葉山人はじめ硏究されたと云ふことを聞いて居りましたから終りに同博士に治療を乞ふことにして先生の處法なる所謂白屈菜の處法を受けた處が是迄每日〳〵胃部の疼痛に難義して居りましたが三日許にして疼痛は恰も拭き取ッた樣に忘れました實に白屈菜の効用は大したものです但し食慾は一日〳〵と減じ疲勞の加はる事は免れませぬが丁度發病十二ヶ月目に至り始めてドット臥床に就きましたが胃部の塊まりは夏密柑位の大さになりました滋養其他あらゆる手段を盡しましたが臥床後三十日間にして毫も苦痛なく遂に永眠致しました。

之に依りて見ますと胃癌は元來疼痛の甚だしきものて見るに忍びないのですが新藥服用後は毫も疼痛なきに至るを見れば全く新藥効顯の著大なるものと信じますが胃癌は今日の處到底全治すべきものにあら

ざれば病者の苦痛を癒する丈にても一大進歩てす尚進んで全治療法が出來る樣になッたら實に一大發明と云はねばなりませぬ。

藥價　藥は栗本博士の處法藥により牛込なる尾澤藥劑師の許て購求しましたが一日分二十四粒にて八十錢他に水藥十二錢一週間を經ては一回十粒一日三十粒に增し二周間に至り一回十二粒一日三十六粒五週間目よりは一回十五粒一日四十五粒（即ち藥價一日一圓）

病中は滋養分は取り得る丈取らせよとの醫師の命なりしかば初期は一日に牛乳五合鷄卵六個ソップ三合其外粥若干を取りましたが九ヶ月目頃よりは分量の少しく滋養多きものを取れとの事て滋養品としては「ビーフゼリー」（牛肉製にして恰も煉藥の如きもの一壺壹圓（一日に三匕位を用ゆ）尚一ッは「ワレンチン肉汁」小瓶なるが一瓶貳圓五十七錢一瓶を凡そ二日に飲用せり此外「トロボーン」九十錢「ミルクフード」八十錢等を用ゐたり。

是等の滋養物は御醫者の言はれる通りに用ゐましたが只幾分か生命を永く持たせる許りで胃癌には外科療法もあるが結局一年にして又々癌は發生して三年の命は保ち難しとは實に難病ではありませんか聊か素人より見たる胃癌の病狀と白屈菜の効能とを皆樣に御吹聽いたします。



婦人と子供

醫學士　廣澤光德

●暑中に際して注意すべき疾患

夏時衞生上の一般の注意に就きましては學友の石原君が詳細に記載せられますから、私しは小兒に關する御注意を申し上げましよう。

夏時に注意すべき、また恐るべき小兒の疾患は下痢と腦膜炎とてござります。

●小兒の急性下痢

醫師の方ではまた急性消化不良とも申しますが、之は最も恐ろしい疾患です、少し年齢の長じた七八歳以上の小兒及大人などになれば、只單純の下痢—食あたりで來た下痢位では命を殞とすと云ふ事はござりませぬが、小さい子供殊に二歳以下位の小兒には下痢の爲に死亡するものが夏時に際して非常に多いのでござります。

二歳以下の小兒であるから多く乳を飲んでをります其内で天然營養で育てられてゐる小兒と人工營養—前申した樣に牛乳等で育てられてゐる子供と比べて、どちらが多いかと云ふと其七八分位は人工營養の兒童に多いのでござります、だから人工營養で小兒を育てゝゐらる方は此際充分御注意を願いたい。

牛乳の消毒の事に就きましては、前に御話し致しましたら、茲では申しませぬが、夏の間は平生よりは數倍も注意して、小心翼々として、牛乳の容器等を洗滌せられなければならぬ以外に

牛乳其物の腐敗して居りはしないかと云ふ點には殊に注心せられたい。

朝來た牛乳配達夫が運び來た牛乳を使はるゝ前には必ず一回は主婦の檢閲を經る樣にせられたい、牛乳の腐敗してゐるや否やは辨別するのは可成り難しい事であるから、下女や乳母などに委せらるゝのは誠に不都合と考へられます。

それで牛乳の色や、光澤、臭氣、其他の狀況に就いて取り調べられて、少しにても平生と異なる所があッたら直に捨てしまはるゝ方がいゝ。

よく見受ける事ではあるが、少し變だと思ひましたが、消毒さへ充分にやれば大丈夫だと思つて、平生の二倍程煮沸した牛乳を飲ませましたら、其次の日から下痢を起して來ましたとは、患兒の母のよく訴へる所で、いくら消毒をよくしても、已に腐さッた牛乳が有毒なのは恰かも腐つた魚を煮て食べるのと同じ事でござります。

下痢の模樣に就きましては、大人ならば初めの間は少し軟かい大便が出た位の事で別段注意もしないが

哺乳兒ですと「しめし」があるから、すぐに分ります。

便の模樣が平生と異なつて來たらば、直ぐに醫師の許に行かれるのが一番安全でござります、初めさ程でもない下痢で一日に二三回位の軟かい便であつたのが、二三日すると一日に拾回以上の水の樣な下痢をする樣になつて熱も出て來（時によると四拾度位も）、忽ちの内に（早いのは五六日て）死んでしまう事がありますから、少しの下痢でも二三歲以下の小兒のは恐ろしものとの念を放されないがよろしい。

療法に就いての注意、是は醫師が致しましようが、醫師の許にまゐらる迄も次の事丈はせらるゝがいい。

一、減食　大人でも下痢の起ツてゐる時には食物を減らすのであるから、小兒にも同じく減食させる、平生三時間に一度飲ませたものなら、四時間に一度位にして、其量も半分又は三分の二位に減じてをく。

二、腹部の罨法　そは「もんぱ」だとか「フランネル」の布で腹部を卷いてあたゝめる。

三、入浴　夏期であるから、小供が「あせも」などを拵ふる事が非常に多い爲と、一つは腹を暖ためるだらうと云ふ素人考へから入浴をさせらるゝ方が多いしかし、入浴は健全なものには必要ではあるが、下痢にかゝつてゐる小兒を入浴させると却つて惡くする事が多くござりますから、之は醫師に見てもらはるゝ迄は見合はせてをかれたい。

四、「しめし」等の消毒　單純の下痢は公て云ふ傳染病ではないが、やはり小兒から小兒へ傳染する事がある、だから小兒が下痢を起したら、其「しめし」は必ず昇汞水等で消毒せられてから洗はるゝ方がいゝ之は他の小兒にうつす恐れがあるからではなく「しめし」を消毒せずに只洗ふばかりでは、其下痢の便の中にあつた毒が再び養育者の手、小兒自身の手などについて、再び小兒の口に入り、いつまでも下痢の治らない恐れがある、其他小兒の衣服も淸潔にし

て、小兒の口內も注意して拭いてやり、養育者の身躰衣服も充分に清潔にする、もし出來るならば小兒に關係してゐる人達は小兒にふるゝ度每、小兒に乳をやる時每には其都度必ず手を洗はれる方がいゝ。

(つゞく)



衛生雜話

醫學士　石原喜久太郎

◉夏時衛生上の注意

先回にも同一の題名でお話申上げ置きました、此度は同題ではありますが前とは別の項目に就きまして更にお話申し度いのであります。

●夏の飲食

夏分は暑さのせいて身躰がしまらなく、胃腸の働きも活潑でない、夏分には胃腸病の少からぬことは實地醫家の唱ふる所であります、殊にまた此時節には是迄屢々虎列刺病の流行もあッた事てすから不斷胃腸を害せぬやうに務め、健康を保ち、惡疫を豫防するのは必要のことです。

夏時飲食の注意としてはまづ次の如く項を分けましやう。

(一)飲み慣れぬもの、食べなれぬものを用心すること、急に珍客樣がおいてになッて內中大騷ぎをしてどんなふうに接待をしたらよろしいやらわから無いと云ッたやうなものであれば、平素慣れぬものは可成飲食しないのがよろしい、いつも慣れてゐるものは縱へ少々消化の惡いものでも故障ならゆくが、慣れぬものは實際屢々胃腸を害ふ事は皆さんも御承知でありましやう。

(二)消化の惡いもの

是は夏に限らず、年中何時でも注意を要することは申す迄も無いのですが、しかし殊に夏分では一層用心するのがよろしいです、固い物、油濃き物、甘過

ぎる物など是なり。

(三)食量

夏分は冬と異なり、身躰の内で冬程に燃料を充分に焚かなくてもよろしい、しかしながら求めて少食する必要もないけれども暴飲暴食は最も愼まねばなりませぬ。

(四)好まない物を無理に食すべからず

食物の消化と精神感動とは親密なる關係のある事は生理學でお學びでありましやう、苟も自分で好まぬ食物の類は如何なることと有るも初から食べないのが肝要です、自分でお客樣となつて、他人から勸められても斷つて食べないのがよろしいのです、忌な物を食べて後で氣持が惡い時にはやはり消化を惡く致します。

(五)生物、生水

を避ける、殊に吐瀉病のある場合は嚴禁であります。

(六)不時の飲食＝間食

胃腸は必要以外には可成休ませて、働かさないやうにし、必要の時には充分に働くことの出來るやうにして置かねばなりません、即ち毎日三度の食事は人間の身體の健康に適當したるものですから、それ以外の間食は避けねばならぬ殊に胃腸を害し易い夏分に於て益々そうであります。

(七)餘り熱い物、餘り冷き物

を避ける、煮立ての熱いものは口中や胃をたゞらす恐れあり、又餘り冷いものも害があります、暑い日に外を步いて、暑さと汗とで、たまらなくなり、氷屋に飛込むが如きは決して皆さんには出來ないことですが、氷水の如き冷き物を急に飲みますと、胃を害ふのであります、若し氷水を飲むならば急に一時に飲み込むこと無く、口中に少し宛含みてゆつくり飲み下せば多少害を防げましやう。

右は用心すべき大體の關係を述べて見たのです、序に一寸夏の飲料の事を申しましやう、夏分は身體の皮膚から蒸發が盛んになりまして汗も出ます、それが爲めに飲料が欲しくなるのは自然の結果です、飲

料も過分に飲むのは勿論惡いが、控へ目に飲むのはよろしいので、それには生水は避けねばなりませんから、麥湯のさめたの番茶のさめたのなどは普通人の用ゆる所でありまして是等はよろしいことと存じます。

虎列剌病の流行する時には改良水道のある土地は安心ですけれども之の無い所では、飲料水、用水の區別なく共々危險です、病毒が水に混じて傳搬の原因をなすことがあるからです、故に凡て煮沸した水を用ふるのです、一昨年九州に虎列剌病が流行致しました時には用水迄も皆煮沸水を以てする事を實行致したのでありました。

●衣服の注意

詳しく云ふ迄もないことですが、衣服は汗付かぬやうに、垢付かぬやうに、常に清潔に洗濯して着用する　若し衣服に汗や垢が付いて縫目を塞げば、縫目が緻密になり皮膚の蒸發を妨げる、是が身體の害になります、次に衣服は洗濯しても糊つて置くときは糊の付いたのが濕りたる場合には黴の着くことあり故に洗濯したるものと雖も日光に曝らして乾すのがよろしくあります。

●●●●**寢具蒲團**の類も出來得るだけ日光に曝らすべし。

寢具の事を述べましたから此處に序に夏分夜、寢に就くことに就きお話致しましやう、先つ熱い晩に戸窓を明けて寢てもよろしいか、どうであるか、と云ふ一つの問を設けましやう、東京などでは一夏の内に二晩か三晩位は熱くて戸を締めては眠れぬ場合があります、斯様な時には少し位は窓を明けて寢ても害はなきや否やと申すに、此問を解決するには、其土地に於ける晝夜の氣溫の變化が劇しきや否やを知ればよろしいのです、日中非常に熱く、氣溫が高いとても、夜中頃から急に氣溫が低くなつて日中に比すれば大層下つてゐると云ふやうな土地では、窓を明けて眠るのは宜しからぬことゝ考へます、身體が冷へて寒冒を招く因となります、以交錯して晝夜の氣溫の差が　著しからぬ所では窓を明けて寢つたか

とて、餘り害はなからうと存じます、例へば長崎の如き土地では夜分所謂夕なぎて、夜更けても氣温がそれ程低くならぬから窓を明けて寢る家が澤山あるのでもわかります、しかし夜分に於て氣温が著しく低くなる土地では窓を明けて寢ないのみならず、また、身に被ふ物も充分注意し睡たあとで身體の冷えぬやうに氣を付けねばなりません、夏にはよく寢冷と云ふ事がありますが、是はつまり睡つてゐる間に、身體に被ふ物が足らぬ爲めに身體を冷却して、寒冒を引いたり、お腹を害ふたりする事です、寢冷にかゝらぬやうに用心するには胸腹掛をして寢るがよろしからうと存じます子供などには一層其必要がありましやう、何となれば、子供は殊によく夜具を蹈み脱ぎますから。

●夏の外出と夏の仕事と

夏分日光が劇しく射る爲めに日中外出する事は注意すべきです、日本内地には餘りきゝませんけれども、熱帶地方では人が日射病に罹ることがあります、此病氣は劇しき日光の射熱によりて起り發汗甚しく、顔面赤色となり、言語も不明となり、呼吸も困難となり人事不省に陷り痙攣を起す等の病狀を現はす病でありまして危險なるものです、夏日炎天の最中に外出致しまして、日光を受けますと汗も出で顔も赤くなり、頭も重く、全身疲勞を感ずることは普通經驗する所で、是は無論日射病でもなんでもないのです、けれども、是より一層進めば身體に害を起すやうな場合にも立至りましやう、故に盛夏の日中には身體の弱い人や小兒などは外出せしめぬやう注意を願ふのでありります、序に申上げ度いのは、白色の物は凡て日光を反射し去りて日光の熱を吸へ取らないのです、黑色のものは之と反對で日光の熱をよく吸取することは皆なんが御承知の通りです、それで熱帶地方では白色の服、白色の帽、白色の靴などを用ゐて可成日光の熱を避けることになつて居ります、是は自然の衛生に適ふた次第と存じます、日本でもやはり夏は足袋は白、衣服は白地、日傘も

白地張を用ふるのは衛生的と云ふべき乎。

●夏の仕事は日最中炎威烈しき時は精神的にも身體的にも可成休息を主とすべし、從つて夏は早朝に起きて涼しき內に出來るたけの仕事をなし、日最中を休み、午後夕景に至りて再び殘務を爲し得ば幸甚ならん。

●晝寢は如何？東京などで晝寢をすれば人が笑ふべししかし、家の風儀とか、或は勤怠とか云ふやうなことを別にして考へれば一體晝寢はどんなものでしやうか、昔は宰予晝寢、子曰朽木不可彫也とて、宰予は孔子樣から大層に叱られました、無論禮儀を紊したと云ふのでありましやう、日本でも地方に參りますれば午後一時二時頃晝寢をする所があります、之は身體に取りてはどんなものか、精確なことは申上げ兼ねますれど、熱い時分日最中に何んにも仕ないならば少々寐るのは反て身體の疲勞を回復することゝ故、益のあることゝ信じます。

（完）



質疑欄

●質問注意　質問中診察せざれば應答し難きものは一切解答せず又答解に遲速あるは登載順に都合ある爲めと御承知を乞ふ●質問は端書にても封書にてもよろしけれど單に質問のみをわかりよく認むる事●質問に姓名を出すことを好まさる方は匿名にても差支なきも事務所へは姓名御通知の事●本號の雜誌に登載する分は凡前月十五日迄に申込まれしものとす

質問者　四谷一會員

問　私知人なる牛込矢來町なる某商人の子供は一夜の內に急に二人病死致し候醫者は脳髓膜炎に罹りたるものと申され近傍のものは何れも恐怖いたし候何卒右病症に對する素人の心得詳細に承り度候

答　一夜に二人も病死するほどの急性なれば所謂流行性脳脊髓膜炎でしやう此病は西洋では今より凡百年前瑞西國に流行したのが初まりで夫れから歐米の諸邦にも時々流行を來し我邦にも四五年前和歌山大

阪などに發生し東京にも數十名の病者を出しましたのはつい昨年の事です

此病氣は急劇に腦に故障を來す病ひでありまして輕重によりて違ひますが劇しきは二三日の後に死し尚甚だしきは五六時間内に斃るゝことがあります誠に恐るべき病ひです併し輕ろいのは初め重い容體でも數日の後に快癒に赴くのもあります死亡の割合は一定しませぬが流行時の統計によりますのに或時は患者の半は死亡し又或時は死亡數僅かに五分の一の事もありましたが此病氣は幸ひ治りましても假令へば「つんぼ」とか「啞」とか盲目になるとか其半身不隨、痴呆、全身痙攣などいろ／＼の不具の疾病をのこすことが多くあります

此病氣の原因は生活せる細菌ですから甲より乙に傳はりて傳染力の強いものです傳染の道は多く鼻液より來るもので病者の「くさみ」又は咳嗽などによりて直接傳染し又間接には鼻液を拭いたる鼻紙「ハンカチーフ」又口に觸れたる飲食器、喀痰、等には恐るべき病毒を含み又患者の衣服、蒲團、病室等も媒介となります此菌は乾燥しましても數十日間は生活するものですから右等の物件に着てて居る汚物は塵芥と共に氣中に飛散し隨て其有毒空氣を吸入するときは其病菌は健康者に感染して先づ鼻の穴の粘膜に附着し爰に巢窟を構へ漸次に腦の内に侵入するのもあり又は咽頭に寄生して腦を侵すのもあります但し此病毒を受けた人は必らず發病するかと云ふに感じる人と感ぜぬ人もありますが病毒は鼻腔中にありとすれば實に他の健者に對しては危險千萬なものでありあります

病狀　此病ひに罹りますときは多くは忽然として重病に陷つた樣になり劇しき頭痛や惡寒がして發熱嘔吐などがありだん／＼に腦病の症狀が著るしくなりまして即ち眩暈精神朦朧となり次に昏睡に陷り呼べとも容易に答へず時に譫語を發し手足或は其他の部に痙攣を起し左或は右の偏身痲痺して自から動かすこと出來ないものあり又は下半身痲痺するのもあ

ります
これは前にも申す通り鼻から來るのですから流行の時は勿論平素でも鼻や咽頭などに故障を生じない樣に寒冒に罹らぬ樣注意され若し病者の出來たときは一定の病院に入院させるか止むを得ざれば看護人を定めて自宅療養をなして家族のものを病室に入れぬ樣にせねばなりませぬ殊に患者の飲食器は使用後は熱湯入れて煮沸し咯痰や鼻液及之を拭ひなる紙片布片汚物などは一定の蓋のある入れ物に入れ之に一と握りの洗濯曹達を入れ沸騰したる湯を入れてかき廻し蓋をして其冷へる迄置き又は火上にて一と度煮沸するは尤もよろしいのです病室は常に清潔になし掃除には采配並に箒濕いたる布片を以てよく拭き掃除をされ使用後は二十倍石炭酸水に浸して消毒するか又は煮沸し看護者は室內にて飲食することを止め汚物に觸れたるときは勿論食時のときは二十倍石炭酸水にて手指を消毒せねばなりませぬ患者の快復しましたとき若くは死亡しました時は患者に使用したる一切の物器は蒸氣消毒を行ふか又は二十倍石炭酸水或は千倍の昇汞水にて消毒し病室は「フォルマリン」瓦斯消毒法を行ひ尚疊建具は日光に曝露して病原菌を絶滅せねばなりませぬ。

問　小兒の生れて多く腰の邊などに青色の「あざ」の出來ることあり成長に至り治する樣なるが豫防法有之候や

質問者　茨木一會員

答　御問ひの靑きあざは兒斑と申すものにて、我國の小兒には皆之あり、何も腰の邊にのみ限るものならず、甚しきは肩、手足にまでもある事ありて、殆んどなきものはなき位、近頃醫學士足立文太郎氏此事に就きて充分研究せられたり、(悉しくは中外醫事新聞を見よ)、此あざは我國の小兒及南洋諸島の小兒にはあれど、西洋人、支那人には著しからざれば、之を以て種族の關係を調ぶるに資する位、豫防等は決して出來るものにあらず。
又此あざは自然と六七年に到る時は消滅するものな

れば思ふるに足らず蓋し動物進化の殘物なるべしと。

問　剃刀や櫛の消毒にフォルマリンを用ゐ又肺結核病者の使用したる器具の消毒に又同液を以て清拭して其効有之候や

牛込の一賛成員

答解者　賛成員　丸山長四郎君

答　剃刀や刃物其他櫛などの消毒は一%（百分中一分を含む）の「フォルマリン」溶液を最も可とす（府下理髪店にては警視廳令にて之を用ふこれなれば刃物の銹びる憂なし又櫛の損することなくして安全なり

肺核結病者の使用したる器具の消毒には「フォルムアルデヒート」瓦斯の消毒を以て最も安全なりとす其法は器具を戸棚一室若くは箱内に密閉し「フォルムアルテヒード」瓦斯を送くるにありそれには田原氏簡便消毒燈を用ふるを良とすれども其用意なくば「フォル・リン」を鍋に入れ緩き火上にて蒸發せしむれば反に「フォルムアルテヒード」の瓦斯を生ず但し患者の居室に衣類を釣し器具と共に居室をも消毒するに若くはなし六疊位の部屋なれば「フォルマリン」一「ポンド」位にて充分なり然る時は能く室の間隙を閉くに注意すべし簡便消毒燈は東京神田淡路町風雲堂にて販賣す就いて訪はるれば使用說明書を呈す

●前號の重曹と曹達の間に對し左の如く賛成員丸山長四郎君より詳細に解答せられたり

答　俗に重曹と云ふは重炭酸曹達又は重炭酸那篤倔謨の事にて化學上の符號は $NaHCO_3$ なり即ち炭酸（CO_2）と曹達（$NaHO$）と結び付きたるものなり曹達とは亞爾加里性の最も强きものにて苛性曹達又は腐蝕曹達とも云ひ炭酸と結合すれば炭酸曹達（重炭酸曹達 $NaHCO_3$ 炭酸曹達 Na_2CO_3）となり鹽酸（HCl）と結合すれば食鹽即ち格魯兒那篤倔謨となる故に曹達とは重曹又は食鹽の一成分と看做せば間違なし市上に販賣する洗濯曹達とは不純の曹達にて一部は氣中より炭酸を吸收

して炭酸曹達となり居るものなり
以上炭酸曹達及苛性曹達は醫藥用又は工業用に用ふ

質問者　臺灣　一會員

問　姙娠五ヶ月のもの肺結核の初期にて入院治療中なるも全快するものや胎兒に如何なる關係ありや內地と臺灣とは病氣に對し何れの地よろしきや

答　肺結核の初期で入院治療中との事なるが全治したる例はいくらもありますから力を落すことはありませぬ只肺結核病は空氣のよい處で營養を充分に取ることが頗る有益です胎兒には豫防の良否によりて生れてから傳染しないとも限りませぬが胎內にありて感染することは少い樣です臺灣と內地の氣候はよくはマダ調べませぬが臺灣は炎暑つよく氣候の變化が多いですから內地の方が病人にはよろしいと思ひます

質問者　山梨　一會員

問　私兒當年三十八歲是と申す病なく候ても誠に瘦せかたにてよわ〱しく肥滿いたす樣いろいろと心配いたし候へども右は平素如何なる食物を用ゐべきや養生法伺上候

答　只瘦かたにてよわ〱し丈けにてはよく鑑定が出來ませんが系統より硏究するの必要があります其方の父母に肺病はありませんか要するに其方は腺病質らし若し然るときは營養療法等をなすがよろしい只肥滿と申しても性質によりて中々肥滿するものでない只デブ〱ふとるのが決してよいのではない餘り太るのは病氣です要するに令兒は別に病氣なしとすれば運動と營養を充分に試みらるゝがよろしからん營養物にもいろ〱ありますが先づ每日上等の牛乳三四合は必らず召し上る事として鷄卵二三ヶの外肉食は日々になし冷水摩擦なども行はれ淸凉の空氣中に爽快の運動を取られて御試みあれ多少の効驗はあらふと思ひます

質問者　愛知　一會員

問　新築家屋の床下は一見淸潔には候へども其儘

床板を張り候ても宜敷候や又は石灰粉等を敷き候方よろしきや衛生に適する床下の處置御示教下され度候

答　新築家屋の床下はよく注意せられて大工などのカンナ屑などまき散らし見へぬ處と思ひ其儘床を張ることなどもありますからよく／＼掃除されて石灰粉を御説の如く悉く散布されるのが安全です殊に床を張らるゝには何つにても床を取り外して床下の充分掃除し易い様になし置くのがよろしいです　悉く釘付けにしては床下掃除に困難ですから是等も注意せられ一年に二度位つゝ石炭を撒布されんことを望みます

問　私事時々痔の病ひ起り困り居候平素の豫防法伺上候

山陰の一女

答　只痔と許りては醫者に分りませぬが痔核と云ッて血管が膨れて來るのと痔瘻と云ッて肛門の周圍に穴が明くのとありますが要するに其原因の最も多いのは硬い便が直腸に詰つて之れが其壁を壓すために其處におい／＼と焮衝が初つて血の管が脹れて來るので其證據には痔核は立働く人よりも坐業を採るものに多い之れは立ち動く人よりは腸の動き方が少く隨ッて大便も缺し勝ちになるのでありますから坐業の方は日々相當の運動を取られて便秘しない様にすることが肝心です愈々痔結節が出來たなら少しも早く燒き取るか藥を注射するかして治癒させねばならぬ痔瘻と云ふ方は肛門周圍炎と云ふので是れは多く結核黴菌から起るのが多いで痔核よりは念の入ッた方ですから是れも早く治療せねばなりませぬ先づ素人の豫防としては便秘をせぬ様心掛けるのが一番です

問　コンテンスシルクは生乳ドの位入りあるものや又薄め方伺上候

信濃通常會員

答　煉乳一罐には米國鷲印の如きものは乳量は凡そ六合位でしやう其内に砂糖が四十匁除は入ッて居

ります其薄め方は生後一ヶ月には煉乳一分と水二十二分一ヶ月を經過する毎に水の分量を一分ずゝ減じて十二ヶ月の終りには煉乳一分に水十一分の割に稀薄して用ゐらるべし

問　俗に「ショウカチ」とか「コシケ」と申す病ひはとんな病症ですか

千葉一會員

答　俗に「ショウカチ」と申すのは尿道淋疾と云ふ病氣で淋病の菌から起るので傳染力のつよいもので其病毒は尿道の粘膜につくときは尿道から膿汁を分泌する樣になります是れが俗に申す「ショウカチ」です又其毒を子宮の內膜に受ける膿汁の樣な排泄物が澤山に出る是れが俗に申す「コシケ」即ち子宮淋疾てす麻疾性のものは傳染して種々の病氣を釀しますから實に恐ろしいものですから早やく治癒せしめねばなりませぬ

問　大人及小兒の普通の體溫、脈搏、呼吸等伺上候

質問者　神田一會員

答　健康體に於て二十四時間中に體溫一度づゝの昇降があります其最も高き時は午後四時乃至五時の頃にして三十七度五分に達することがあります又最も低き時は夜明にして三十六度二分位に下ることかあります病者の尤も高き熱を四十二度とし最も低きを三十五度とす高熱は惡兆には相違なきも僅か一回若くは二回位なれば夫れ程の害はありませぬが高熱の數日に亘り下らざるは全く病勢增惡の兆候です

脈搏　大人は普通平均六十乃至八十にして一分時間七十二回を生理的の脈搏とす女子は少しく多し老人は小兒に類す小兒の脈搏は左の如し

一歲の小兒	一分間	百三十四回
二歲乃至三歲		百十乃至百八回
四歲乃至六歲		百回
六歲乃至十歲		九十二回
十歲乃至十六歲		八十四回

脈は腦病にありては其數少く「チブス」以外の熱病心

醫術にありては其數多しとす醫學進歩の結果臨牀外に種々の材料あるが爲め稀なる場合の外は時計にて精算するの必要なし醫師の患者を診するに當り近時必らず時計をながめつゝ行ふは脈を計るには相違なきも蓋し一種の癖となれるが如しとは竹中學士の警語に見へたり

呼吸　大人は一分間十八回初生兒は百十回乃至七十回を常とす熱多く脈搏頻數するときは呼吸も又之と伴ふ呼吸を算るには患者の胸の上に手を靜に上せて數ふべし



研究欄（會員の寄送を望む）

◎生盛の刺身

生盛とはしたぢを覗き猪口に入れ刺身は別に刺身皿に盛り本膳のさしみの如くするなり魚は何魚と云ふに限らず刺身によき魚を作り身にして皿に入れ其上にめうがと大根を繊うちにして紫蘇の身と一所に載せ又青海苔を水戻しにして其傍に置くなり又覗猪口には煎汁を入る其煎汁は醤油四分と酢二分とを交せて之を沸え立たしてさましたる煮なり又青海苔を水戻しにするとは唯だ青海苔をちよつと水に浸して絞るのみの事なり但し之れは本膳に限らず通常の肴に用ひてよし右の猪口には空豆の粉吹煮など宜し茲に空豆の粉吹煮のつくり方をいひ添ふべし

新空豆の皮をむき鍋に入れ湯でやはらかになりたる頃水をしため鹽に白砂糖にて加味しかきまはしながら煮るなり豆は青く白き粉を吹きて中々風味よろしきものなり

◎白瓜料理

白瓜の皮をむき縦に切りて五分間許りサツト湯で水を捨て之を鹽、胡椒、バタにて加味し然る後白瓜を引き出し其跡の汁に少量のうどんこと水とを入れ十分

許り沸騰せしめて後二個の鷄卵と青味少し許りと能ふべくはクリームをも入れて能くかき廻し之を白瓜の上よりかけて食膳に上すべし



●門司市の一會員に答ふ

福神漬のつけかた

羽田三紋子

なす、なたまめ、小かぶ、しそ、を鹽にしておき細かにきざみて一夜水に浸し鹽氣を除きおき又大根は八つ位に竪に割りほしあげて細かにきざみて水にて洗ひおく扨つけ込むに及び右の物を何れも水分を除く爲にきびしく絞るなり（絞るには機械あれども御慰みなれば手にて絞るもさしつかへなし）それより左の割合なる汁を凡十五分間沸騰させてさましおき右の數種を入れまぜ冬季は四日間夏季は一晝夜即ち二十四時間漬けおき食すべきなり

最上醤油一樽に付（みりん一升 ざらめ二百目）



名家談片

▲牛乳と肺結核　聖路易萬國博覧會の招聘に應じて渡米する菊地、穂積、北里三博士の爲め帝國教育會に開きたる送別會席上、北里博士が演説せる肺結核と牛乳との關係の要旨左の如しと

萬國學術會議の案内狀にて生物學中の細菌學バクテリオロヂーにつき演説すべしとあり、右につき歐洲よりも二名の重なる代表者出席する由にて、余亦合せて三人あり、余は血核につき研究しつゝあれば、出發前には質疑を了るべし、血核に就ては兩三年以來大問題起れり、先年コッホ氏は牛乳中の血核菌は恐ふるに足らずと論せり、然るに獨逸の有名なる細菌學者ベーリング氏は正反對の説を立てゝ曰く、人の肺血核に罹るゝ原因十中八九は牛乳の血核菌にありと此の兩説を定むるには日本は最も大切なる國なり、日本には未だ多く牛乳を用ゐざる地方あり、然るに斯る地方にも比較的に肺血核患者は多し、而して殊に最とも面白きことは西洋（特に英國）より輸出せし牛及び其雜種には、血核菌甚だ多きに拘らず、純粋なる日本固有の牛には血核菌全くなし、日本固有の牛の血核菌に感染するや否やを實驗せしに、濃厚なる多量の血核菌を極めて危ない方法を以て注射せしも、感染すること甚だ稀なりき、然るに雜種の牛には直ちに感染せり、而して日本に於ては純粋なる日本牛を牧する地方に於ける血核患者の數は洋牛を牧する地方に異なるなし、人の血核菌と牛の血核菌と區別ありや否や、此問題を決定するには日本に於ける實驗は有力なる材料たるなり、（尚

同会議は、血族に關する外科縫と細菌との關係につき演説せんことを余に求めたり、故に余は創傷及び破傷風につき、多年研究の結果を發表せんと欲す、云々

▲身長を伸ばす新法　讀賣新聞九千二百號所載

巴里發刊コスモス誌にエーピール氏は如何にして身の長を高くするかと題して左の興味ある文章を掲げたり

愉快なる生活　氣候の影響を外にして尤も身長に關係ある愉快なる生活を營むにあり和蘭の如き人民の自由を充分に樂みつゝある國民が身体の發育充分なるが如き其一例なり

職業の關係　も又大にして心地よき職業に從事せるものは不快なる勞働に役せらるゝものに比し身長高し市府の住民は農民よりも概して身体大にして巴里市の徴兵檢査は田舍の壯丁よりも平均大なり

食物との關係　弱年者の苦役等は皆人体を小ならしむは明なれども就中尤も恐るべきは「アルコール」の害なり小さき犬猫を得んとせば其親の食物中に少許の酒類を混合するを以て得策とす

食物の種類　古來多くの珍説あり醫術の大家ヒポクラチスは穀類の食物を以て小軀の兩親より大兵の子女を擧ぐる良法なりと論じパルクリー點は食物の精撰により一小兒の發育を試驗せしに長じて七呎の大男を養成するを得たりと

大軀を得る最良食物　穀類を以て製せる粥の如き流動性の軟食なり（婦人衛生記者曰く我國の角力は自然此法に適へり）乾燥せる剛堅多き固形の食物は全く反對の結果を生ずべし北部歐洲の人民は牛乳茶其他の飲料を用ゆること極めて多量にして南部の人民は之に反す而して身長は南北甚だしき懸隔あるは事實なり穀類を充分に煮たる汁（麥、米、燕麥を三時間以上煮たるもの）は尤も適當にして小兒の食料として身長を加ふること多し但剛堅性の藥味を厳禁し砂糖を加味すべく又冷却なる後に嚥下するを要す此種の穀食は人体の骨を組織する要素たる燐を含有すること尤も多くして爲めに身長を延ばすの力あるものゝ如しと

體操的運動　適當なる運動は勿論手足の關節部に少許の電流を懸くることは更に有効なりとす以上の食料運動法等を以ても尚能く身長を加ふること能はざる場合に

最後の手段として一良法あり他なし　羊又は小牛の如き動物の頭の前部に當る淋巴線を生のまゝ食することなり此の物質は最も有効なる良劑なり但し如何なる場合にも酒類を厳禁せざる可からず酒類は殆ど人体の發育を妨ぐるものなればなり

人体は二十七歳まで生長する者なれば此等の方法は幼時より此の年頃まで規律正しく使用するを得策となす云々

中外彙報

◉戰時陣中心得（前號の續き）

其二　渇病

一、渇病とは日射病の中熱病の總稱にして酷暑行軍の際屢々發する危險の疾病なり

二、行軍に慣れざる者、體質弱き者、過勞後並病後の者、睡眠足らざる者、房事に耽ける者、空腹の者、口渇の者殊に酒を飲む者は本病に罹り易きものと知るべし

三、各自の守るべき渇病の豫防は主として攝生を愼み飲酒を禁じ油斷なく水筒を充して渇に備へ食事と睡眠を缺かざるにあり其の他酷熱を避く

るため出發時刻を早め日中休止し行軍縱隊を疏開し負擔品を輕減し胸を開き風を納れしむる等の事は隊長の令に依る

四、渴病の前徵は發汗非常にして淋々顏面より流れて眼に入り襟を濕ほし心窩に浸り頭部、皮膚共に熱して呼吸迫り動悸高ぶり胸部苦悶を覺えて兩脚震顫し眩暈して今にも卒倒せんとする感あるを常とす此時その旨を直に申告して伍を離れ陰に憩ひて先づ水飲み衣を開き次に冷水もて頭を洗ひ胸を拭ふときは忽ち快復するものとす

五、前記の徵表あるに拘らず猶は隊伍に列し蹣跚行進を續るときは發汗漸く止みて皮膚燥き唾液口唇に粘り附き心動微に呼吸淺く遂に人事不省と爲りて卒倒す手當若し後るゝときはそのまゝ死するものとす

六、戰友中右の如く渴病に罹りて卒倒したるものあるときは軍醫の來るまで左の方法に依りて救助を爲るべし

(イ)先づ此病者を陰ありて風通の善き處に運び衣袴を脫ぎ襦袢を緩め上身を高くして臥さしめ病者の傍には人の多く寄集まるを禁ずべし

(ロ)次に冷水もて頭と胸若くは全身を洗ふべし或は濕布にて全身を裹み徐々に水を注ぎてその濕りを保續するも可なり

(ハ)呼吸若し不充分なるときは人工呼吸法を施すべし

(ニ)人工呼吸を行ふの間には始終扇子、團扇等にて風を送るべし

(ホ)病者の手と足とを摩擦すべし

(ヘ)病者醒覺せば多量の水を飮ましむべし

七、傳染病豫防の心得

一、傳染病は體内より湧出る病にあらずして其の毒必ず外より入來りてこれを起すものなれば相當の注意と方法とに由りて豫防し得るものとす

本病の毒は大抵目に見えざる微細の生活體なり此物一たび吾人の身體を襲ひて適合の場所を得るときは忽ち繁殖して重症を起し生命を奪ふべし古來內外の戰役に於て病死者數常に戰死者よりも多きは概ね傳染病の關する所たり故に其豫防に就ては幹部の施設嚴密なるべき筈なれば各兵は衷心よりこれを遵奉すると同時に銘々の注意も寸分怠るべからず

二、平戰時共に好みて軍隊を襲ふ傳染病は腸窒扶斯即ち熱病なりその病毒は主に飲食物を介して體內に入るものなれば生物を食はず生水を飲まざるを以て豫防の第一となす本病毒は又衣服、手指などに附隨して何時となく口へ入ることなれば務めて衣著の塵を掃ひ下著の洗濯を行ひ手指は可成食前に洗ふべし

三、赤痢と虎列剌との病毒も亦腸窒扶斯と同じく飲食物を介して人に傳染するを常とすれば是に對する豫防法も亦大要前と異なるなし但し未熟の果物は下痢を起し易く病毒感染の下地を作る恐あるが故に此の際殊に之を戒むべし

四、痘瘡は支那朝鮮に於ては尚流行の跡を絕ざるを以て縱令種痘したる者と雖該病者には勿論その家にも近寄るべからず

五、百斯篤は通例皮膚の疵傷より入る病なれば其の流行の兆あるときは平常には意に留めざる程の小創微疵にても軍醫に診を乞ひ手當を爲し置くべし又此際暫時たりとも裸足にて步行すべからず手套は務めて塡め居るべし

鼠と蚤とは該病毒傳播の主なる媒介者なれば成し得る限りこれを驅除し且飲食物に觸れしむべからず

六、麻剌里亞即ち瘧は蚊の媒介にて人に傳染する病なれば蚊帳其他に由りて蚊に螫されぬやうに用心すべし

七、花柳病とは痳病、下疳及梅毒の總稱にして有毒の婦人に接して得る所の傳染病なり支那朝鮮

などの淫賣婦は悉く有毒なりと心得苟且にも此等に近づきて當に其身の禍を招ぎ恥を曝すのみならず累を子孫に遺すが如きとあるべからず

八、傳染性眼病中恐るべきものは埃及眼病即ち「トラホーム」なり是は洗面盥、手拭等の共用より傳染すること多ければ此眼病流行の兆あるときは勉めてその共用を避くべし盥等の不足より共用の止を得ざるものある時は先づ清水もて數回洗ひ流し然後にこれを用ゐるべし淋病に罹るもの己れの汚れたる手指にて己れの目に觸るゝときは所謂淋毒眼に罹りて忽ち明を失ふことあり深く自ら愼むべし　(完)

◉中央新聞記者水田榮雄氏の
　マギー女子訪問記より拔萃

水田氏は先づ豫備病院、軍醫、負傷將卒、看護婦に對し女史の感ずる處を聞かれしに御承知の通り未だ日も淺きことゆへ種々研究視察中ですから正しい事は後日に讓つて戴かねばなりませぬが豫備病院の各醫員一同の方に對しては上位下位の人を問はず總て大層親切にして下さいまして私共一行の常に感謝して居る處と愛嬌を振りまかれしと

▲戰場治療に就き　兎に角二十世紀の戰術と武器の進歩によりて日本軍醫方が醫學上醫術上多大の貢献をされて世界戰傷治療の新記錄をお作りなさる事と思ひます云々

▲日米軍醫　全く同じ階級にあるものと思ひます或時は亞米利加の優つた點もありませうし又或時は日本軍醫の優つた點も御坐いませうが要するに總て同一の程度標準に進歩して居ると云ふ事は私の申して憚らぬ所なりと

▲傷病將卒の靜肅　私が各病室を見舞つて其言動を見ますに概して亞米利加の傷病將卒などよりは銘々よく其言動の愼み方を心得て居られると見へ至つて靜肅なりと

▲日本兵士と教育　偶々「ラッセル」孃の談に移り同

女史の言に日本の兵士は概して教育がよく行屆いて居ると見へ多くの兵士は重に好んで手紙を書く端書を認めるそして夫れを親友や友人に贈る事が何よりの樂みであるらしく手紙の書けぬと云ふ兵士は皆無の様ですと賞め

▲日本兵士の潔癖　日本兵士は亞米利加の兵にも増して頗る潔癖の特性がある夫れは兵士が他の病院へ移さるゝ時などは朝早く暗い内から起きて困難な世話しい時間のないのに誰れも皆丁寧に歯を磨き楊枝をつかつて綺麗に顔を洗つて護送される處と見ればと

▲看護婦訓練と組織　看護婦訓練の事は研究觀察中ですから確かに申上げられませぬが大によろしいと思ひますが貴國と我國とは其趣きを異にして貴國は皆赤十字社に於て一定の教育と訓練を受けたものを揃へてある様に覺へますが我亞米利加では各地方の各種病院から應募しますので勿論教育の基礎は同様ですが豫備病院などに集合しましたときは御互に平素の手並を競ひまして大に其長短良否を研究するの徐がありますがこれは我が相互比較して大に趣味ある徐を受けつゝありますから此事は後日記述致すことに致しましやう

▲看護婦の男わざ　日本の看護婦は男子のする事假令へば病院内で擔荷をになひて傷病者を運ぶ事などあゝ云ふ事は私共の見馴れぬことで夫れ等の事は男子にさせたらよいなどゝ云ふことはいよ〳〵研究の上ならでは輕忽に申上げられませんと病者の事に及びましたが女史は北清事變を例に引きて御承知でも御坐いましやう當時列國中一番平病者の多かつたのは露國で百分の八以上で又一番少なかりしは日本で是れは百分の二其次が亞米利加で百分の三英や佛や獨逸は何れも百分の三乃至八迄の中間で在つたと申す事でこれは鳥渡と面白い參考ではありませぬかと適切な例を擧げ

▲女史の家系　を尋ねられし答に父は天文學者で先日貴國の新聞紙に譯載されました世界の末期の著者

て女史の家は元佛國ヒユーゲノツトの貴族で一族中には陸海軍の出身多く戰功のあつた將校もあり父學術上から米國水路部の創設者であつた者もあり祖父は軍醫で或時郵船の乘客にて歸航中暗礁に觸れ沈沒の際他人を救助斡旋の爲め自分は非常に游泳に達せしも遂に非命の最後を遂げられしこと等女史の系譜を愛するの餘り御尋ねにより御話し申すと謙遜して話されしと

▲胸間のものたる　を問はれしに英國より戴いたのも大分ありますが其内で是れが米國革命介嬢會の紀牌して目下の會員が四萬人にて女史も五度此會の役員に推されしとて其證を示されしといふ

さすがは我國に率先同情を表して渡航せられた主働者丈ありて家系と云ひ學識と云ひ社交といひ兼備せられたれば日本女史好個の模範とも見るべき女丈夫とこそ云ふべけれ

因に記す　同女史一行病院船乘組の事は陸軍大臣の許可を得しにより先づラツセル孃を先登として孰れも一航海づゝ交代に勤務せらるゝこととなりと

尚同女史は呉海軍病院及松山豫備病院視察の事も許可せられたれば近々出發の筈なりといふ

▲夏時の牛乳　此頃はどこの牛乳屋でも殺菌とか消毒とか何れもあらゆる文字を並べてあるが是等は一種の手段の樣過ぎないようになつた中には牛酪を製した跡の無脂乳を生乳の中へ三四割の比例に調合するのもあるさうだ在留外人の如きは夫れですから生乳の配達を註文して自から消毒をするといふ事です牛乳に一合四錢のも五錢のも六錢のも八錢のもいろ〳〵區別があるから之を知らぬ顏で牛乳屋にどう云ふ譯で值段に高下があるかと聞くと四錢のは絞り立ての儘で（但し水を澤山に存したる薄き乳？）で五錢六錢以上のものは「其中にクリーム及濃厚の乳を入れる分量の多寡に關係するものだと云つて居りますがクリームを取つてしまつた跡や水の樣な乳を呑む位なら玉子でも呑んだ方がよい玉子も夏期は注意せぬといけませぬから何れも注意に注意されねばな

りませんよい牛乳なれば勿論是に勝るものはありませぬか老婆心までに

▲窒扶斯流行時の注意　本年は赤痢と窒扶斯流行の兆がありますが此病ひは多く緩慢性のものが多く中々治癒し難い病ひであるから飲食物の注意が必要てある斯う云ふ傳染病には酸性の食物を取るのがよいのでこれは確しかに窒扶斯や赤痢、コレラの如き病菌を殺す力がある梅干又は酢を用ゐた消化のよき料理は此際よろしいのでコレラ病流行のとき梅酢を呑む杯の事も偶然の事から始まつたのであろうが之は經驗より得たる智識であろう飲料水は勿論の事雜水とても水道用水以外のものなれば一旦煮沸して用ゐることを忘れていふらぬ兎角煮沸水を用ゐることは面倒しがるものなれども僅かの注意で大病を防ぐことが出來るので香の物の如きも湯さましに煮たるもて洗つて用ゐるようになし生豆腐などは不消化でよくない其他果物の如きも洗ひ方の不充分であつたならどんな黴菌を嚥下するかも知れぬ桃や林檎は下痢し易き性分のあるもの故傳染病の流行するときは生て食べぬ事を忘れてはならぬとは某博士の談話せられたる一節なり

▲病院船の看護婦（朝日新聞所載）　赤十字社の看護婦は從來專ら陸上の勤務に當り海上の勤務は三十三年北清役に僅に十名試驗的に採用したるに過ぎず然るに其成績佳良なりしゆゑ今回は看護人と折半し一般男女二十二人づゝを採用することゝなりしものにて言はゞ其實効は今回始めて認證せらるゝ次第なり斯く今回多數の女子を海上の勤務に當らしむるに就ては多少其前途に杞憂を抱きしものもありしやにて此のほど博愛丸を訪問せし時藤田軍醫監も來合はせ岩田醫長、吉川理事等と種々話頭は此問題に上りたり然るに醫長理事の實地談に據れば船中の看護婦は愈々其効能を發揮したるものゝ如し其故は（一）男子の看護人は多くは一時的にして女子の如く永く看護を業とするものにあらず其教育も女子は三年の修業を踏み男子は十箇月の講習を爲せしに過ぎず（二）

其素養に至つても男子にして相當教育あるものは他に方向を求め女子は小學教員位の學力あるもの進んで看護人となれる事(三)其病者に對する同情職務に對する熱誠共に女子の天性として男子に勝る事等着々事實の上に於て顯著なる効果を奏し戰地に於ける傷病者が男子の手より女子の手に移さるゝや恰も温かき家庭の保護を受くるが如き感ありと云へり此一事にても患者に及ぼす効力の大なるを知り得らるべし行く〳〵は看護上力量を要する部分に少數の男子を使用し其多數は女子を以て之に充つる事米國のレ、フの如くならしめたし女子の體質力量共に海上の勤務に十分の成績を認められたりと云々とありき

▲神奈川縣下の赤痢　神奈川縣下に於ける三十六年度の赤痢患者は初發より七月十五日まで百六名なりしが本年は同日百二十三名にて十七名の增加なりされば其筋にても種々豫防撲滅に盡力中なるが中にも三浦郡中西浦村尤も激甚にして初發以來六十餘名を出し現在の患者又多きにより縣廳より醫師二名出張し十五日には内務省より安藤檢疫官も出張したりと

▲帝國大學卒業者　去十一日帝國大學卒業者は法科百四十八人醫科九十二人工科百三十五人文科六十人理科十八人農科二十一人合計四百七十四人なりしと

▲東京府下の傳染病　本年六月十七日より同二十三日に至る一週間内に發生及び死亡したる傳染病患者の數は左の如し

市郡別	赤痢	腸窒扶斯	猩紅熱	實布垤里亞	計
東京市	一九	二五	一	七	五二
荏原郡	一	一	—	二	四
豐多摩郡	二	一	—	—	三
北豐島郡	—	一	—	一	二
南足立郡	—	—	—	二	二
南多摩郡	一	一	—	—	二
北多摩郡	—	四	—	—	四
計	二三	三三	一	一二	六九
○					
死亡	五	五	—	四	一四

▲教育障害事項調査會　同會は東京府教育會の主唱に係り其目的は兒童の感化に惡影響を及ぼすべき事

項を調査して其處置法を講究するものにて過日其第一會を開き各團體より三十二名の委員を擧げて調査講究の端緒を開けり

▲東京府教育會女子體育部設置　女子體育改良の目的を以て辻帝國教育會長加納體育會長岡部子爵夫人等顧問なり井口あぐり氏其部長となりて設立せられたり女子體育の良否は實に婦人の活動如何に影響する處少からずして大にしては國民の元氣國力の消長に關することなれば當部の設立は眞に刻下の急務と云ふべきなり尚詳細の規約は神田錦町一丁目なる東京府教育會に照會せらるべし

▲大日本私立衛生會總會　大日本私立衛生會は來七月十六日(土曜日)を期し石川縣々會議事堂(金澤市)に於て第廿二次總會を擧行せられしが頗る盛會なりしといふ

▲高崎支會の美擧

今回出征軍人の高崎停車場通過の際同支會の役員及會員諸氏は殆んど總出の有樣にて各兵士に茶菓の接待をなせしこと其數今日迄約三萬以上に達し今尚繼續しつゝありといふ其費用は從て多額なるも皆會員有志者の寄附にかゝりしものなりと殊に出發兵士接待の困難なることは軍隊列車の多くは普通列車以外にして往々夜中あり夜明け方あり暴風雨などの時もありしが會員諸姉の熱心なる出征軍人の勞苦を思へば深更も暴風雨も厭ふべきにあらず此等の場合こそ却つて士氣を鼓舞すべしとて何れも熱誠を以て軍隊の爲め盡されしことは大に高崎全市の感動を惹きしといふ其現況は撮影の上本會へ寄送せられたれは他日本誌の卷首に掲げん高等支會々員諸氏の熱心なる行爲は眞に軍國婦人の實を擧げたるものといふべきなり

大日本婦人衛生會記事

本會七月例會

七月二日第一土曜日午後正一時半ゟ神田一ッ橋通女子職業學校に於て例會を開く席定るや陸軍歩兵少佐堀内文次郎君には軍隊的衛生の一部分を婦人方に希望てふ演題にて大畧左の意味にて演述せられたり凡そ勃興する國の衛生は軍隊の衛生と共に一致せさるべからず余は専門の衛生に至りては門外漢なるも軍隊の衛生に至りては職務上研究する所ありとて軍隊的衛生の普通衛生に異なる點數ヶ條を擧げて其差異を説き要するに軍隊の衛生上必要なるは第一精神なり精神鞏固なれば假令飢餓に瀕するも衣服は汗に浸さるゝも只己れの任務の重大なることにのみ精神を集注せば漫りに苦悶することなく却つて血液の循環を助けて身體の保養をなすべきなり蓋し普通衛生にありては斯かる必要なきも軍隊の生活にありては又止むを得ざるなり兎角衛生の進むに從ひ此等の衛生は縮少せらるゝなきかの感ありされば軍隊的衛生法の一部は普通衛生以外婦人方の注意を希望する所なりとて平素寒暑に堪へ得る習慣を造るべきことと華族富者の子息は往々軍隊的衛生の不充分なることより歐米人殊に我同盟國たる英國人の運動盛んなることを説きて大に體育を奬勵し尚例を源平の興亡に取り蓋し堅固の國民を得るは鎌倉武士的ならざるべからず「アングロサクソン」の起るも又之に外ならずとて今回英國女王より特に差遣せられたるマッコール女史の實例を擧げて英國に於ける軍隊的衛生の盛んなるを説き又敵方ながらマキョップ大佐の娘の從軍を願ひ出でたるなど勇壯の談に移り終りに支那及朝鮮女子の體力志想共に薄弱なるが爲め其國民に及ぼす影響より延いて今回の召集に應じたる兵士中にも優柔なる家庭に育ちしものは人より數倍の艱苦を嘗めし等の例を引きて大に家庭に於ける婦人の注意を促がし最後に婦人思想發達の如何は其國の興亡如何に關せることと大なりとの意味にて終結せられ次に警察醫長醫學士栗本庸勝君には疾の話附ペストに就て婦人の注意と云へる演題にて滿州は天然痘の本場でコレラ赤痢なども流行しつゝあるが軍國の衛生に就ては

國民の頗る注意を要すべきてあるが其中ての問題は「ペスト」て日本人は兎角浮氣か少し流行が止むとヂきに忘れ……と先づ一警を加へ夫れより「ペスト」の原因たる鼠の性質を詳述せられ延いて古來よりの迷信を説破して驅鼠の必要に及び又東京瓦斯紡績會社に於ける「ペスト」發生時の模樣より流行時の統計表諸種の鼠捕器等を示して細説し最後に鼠を捕る捕らぬは實際問題なるも家庭衞生の事は婦人を中樞として進捗せしされば到底滿足の結果を得難しとの警告を與へて結局せられ四時過ぐる頃散會せしが當日役員には濱尾副會長、羽田三緒子、高木から子、鳩山春子、田村きよ子、高橋孝子、石川定子、松平芳子、岡田德子(出席順)の諸氏にして傍聽者は相變らず會員及女學生の多數なりき

新潟支會報告

◎六月例會

六月十三日午後一時より新潟市なる西堀通り長善寺に於て通常會開催し左の講話ありたり

一 咽喉病の衞生　講師 黑岩福三郎君
一 繃帶練習頭部及顏部　仝 長谷川一陸君
一 音樂の練習　仝 青木たけ子

因に記す先月の總會に於ける役員改選の結果左の如しと

會長 小柴きく子　副會長 缺員

幹事 和田くに子	幹事 中村しげ子
仝 吉閉はつせ子	仝 佐柳ちよ子
仝 湯原じゆん子	評議員 渡邊くら子
評議員 加藤かう子	仝 鍵富かう子
仝 河上ふさ子	仝 神尾つや子
仝 柏倉ひろ子	仝 吉村きよ子
仝 田代てふ子	仝 多田しか子
仝 中村きん子	仝 梅木しづ子
仝 寺田とみ子	仝 荒川てい子
仝 坂木いち子	仝 渡川たま子

山形支會報告

◎郊外運動會

例年五月は同支會の總會に相當するも本年は國家多事の際なれば見合せ會員有志者にて過にし六月五日(五月例會日に此會ありしも雨天の爲め順延)

郊外運動を催しぬ當日は午前八時より事務所に集り各自特に握り飯を携へ一同打ち連れて千歳公園近傍なる松原に赴く此日天氣清朗にして野外の空氣殊に淨よく綠陰の下に淸遊一日を消し三時頃一同樂しく散會せり來會者は岩本副會長を初め約八十名なりしといふ

當日の寄附　金五十錢　高橋やよ子

役員改選の結果左の如し

支會長　田中きみ子	副會長　岩本しげ子
幹事(再任)西野きぬ子	幹事(再)中原きえ子
仝(再)細野さだ子	仝(再)佐藤たみ子
仝(再)北島もと子	
評議員　関井よしな子	評議員　關根たか子
仝　柳しか子	仝　高橋まさ子
仝　津田ゆき子	仝　河合よし子
仝　友田ため子	仝　今野うた子
仝　村井こと子	仝　若林つね子
仝　犬塚えみ子	

●六月例會

六月九日第二土曜日午後一時より女子師範學校内に開く會員並に學生の傍聽者約百名あり師範學校長津田校長坂口、犬塚、北島の三講師等出席せられ左の有益なる講話ありて三時閉會を告ぐ

教育勅語の話　津田鶴太郎君
トラホームに就て　坂口格太郎君

米澤支會報告

●六月例會

六月十三日第二日曜日午後一時より米澤市なる高等女學校内に開く多數の來會者ありて左の講話及即席西洋夏菓子チリームの料理等ありて講師及び出席の諸子に分ち午後四時散會せしが出席の講師には高梨隆造、土佐林豐一、宮崎厚庵、關新太郎、高橋達五郎、矢島善助、矢尾板信止、猪股松三郎の諸氏にして役員には副會長加藤はる子、幹事馬場みつ子、田中みと子、上倉たけ子、猪股はる子以下會員の多數なりしといふ

當日の演題講師は左の如し

一眼病の話　土佐林豐一君
一結核豫防法　高梨隆造君
一實地繃帶用法　高橋達五郎君
一齒の衛生の話　關新太郎君

茨城支會報告

●六月例會

六月廿六日（日曜日）正午より水戸市下市幼稚園内に開く豊田副會長開會の辭を述べられ次て波多野病院長には飲料水に付て一般の注意並に同市下市の用水につきて改良すべき要點を擧げられたり次に濱口師範學校長には演劇改良と題する演劇研究的談話ありつぎて會務の報告をなし終つて會員一同の懇談あり午後四時半散會を告げしといふ

弔詞

本會通常會員（在美濃）山田ふさ子には本月二日病死せられたり

本會は謹みて哀悼の至情を表す

私立大日本婦人衛生會



●本會入會者

○再入
●茨城縣土浦町中城　通常會員　菊地榮子

○四谷石川定子紹介
●大阪市南區天王寺悲田院町　通常會員　又木きく子

○神田堀内きん子紹介
●日本橋區通四丁目七番地　通常會員　津村文子

●高崎支會入會者

○篠崎きく子紹介
●高崎市田町九十三番地　通常會員　吉田千代子

○幹事二橋ひろ子紹介
●仝市大紺屋町七番地　通常會員　杉森よし子
●仝市柳川町百二十二番地　通常會員　清水よし子

○吉田友子紹介
●信州松本蟻ヶ崎聖マリヤ女學校内　通常會員　佐藤榮子
●高崎市新紺屋町三十四番地　通常會員　成田せん子

○保坂なか子紹介
●仝市柳川町七十六番地　通常會員　信田きく子

○事務所へ申込
●仝市柳川町百二十番地　賛成員　古屋壽一君

○飯島とく子紹介
●仝市田町　通常會員　小川やゑ子

○幹事秀島ゆき子紹介
●仝市赤坂町　通常會員　長澤けい子

○幹事鈴木たね子紹介
●全市柳川町百二十八番地　通常會員　森さき子

◎茨城支會入會者

○幹事小田梅の子紹介
●水戸市上市泉町　通常會員　柳橋はる子

◎新潟支會入會者

○幹事和田くに子紹介
●古志郡長岡町玉蔵院町　特別會員　山口清子

○幹事中村しげ子紹介
●新潟市上大川前通五番地　特別會員　市川ます子

○前むね子紹介
●全市本町通七番地　特別會員　竹内かう子

○鏡淵りう子紹介
●全市本町通九番地　通常會員　鍋谷きた子

○幹事多田しか子紹介
●全市旭町通二番町四番地　通常會員　江口みつ子

○幹事神尾つや子紹介
●全市学校町二番町　通常會員　相原れん子
●全市旭町通　通常會員　鱸はま子
●全市旭町一番町[illegible]番地　通常會員　田中喜惠子

○小柴會長紹介
●全市営所通二番町　特別會員　笹井よし子

○吉井さく子紹介

●新潟市　通常會員　吉澤とり子

◎山形支會入會者

○岩本副會長紹介
●山形市　特別會員　若林つね子

○北島幹事紹介
●山形市　特別會員　犬塚えみ子

◎宇都宮支會入會者

○調所幹事紹介
●宇都宮市　通常會員　大橋のぶ子

○笹原評議議員紹介
●全　通常會員　白仁まさ子

○[illegible]井評議員紹介
●全　通常會員　隅田ふさ子

○須賀幹事紹介
●全　通常會員　淺山きん子

◎米澤支會入會者

●米澤市　特別會員　竹村さと子
●全　通常會員甲　藤倉ふし子
●全　通常會員甲　樋口たま子
●全　通常會員甲　神尾くに子
●全　通常會員乙　大熊いせ子
●全　通常會員乙　小山きう子
●全　通常會員乙　神尾ちう子

●長崎部　通常會員之　岩崎千代子

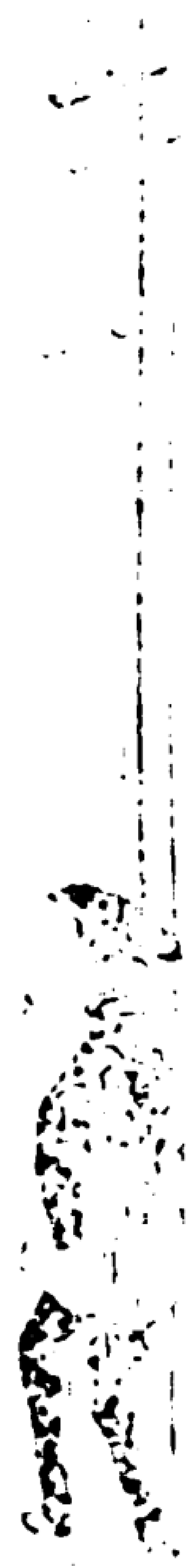
●訂正

●本年四月第百七十三號入會者欄中石田氏ハ通常會員とせしは次の誤
特別會員　石田裕子

●仝年六月第百七十五號異動の部
新潟支會より本會へ轉入と改ム　山下から子

●仝年五月百七十四號六月百七十五號中
通常會員ハ特別會員ノ誤リ　山根松枝子
仝　特別會員　前川菊の枝子

●仝　改姓
原澤四津子改　中島四津子
仝　三上寧子改　増野寧子



●轉居

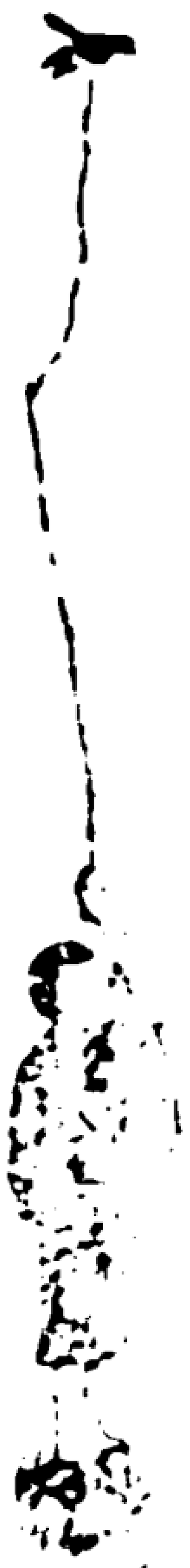
▲會員諸姉御轉居の際は可成新舊兩所御記入事務所宛御一報相願候

●靜岡市水落町一丁目二十五番地へ　名波なを子
●淺草區山ノ宿町三十二、山縣氏方へ　宮山孝子
●山口縣山口町竪小路六百四十九へ　諏訪幾久子
●麴町區八重洲町二ノ四、松井氏方六號官舍へ　大谷てう子
●大阪府下泉州濱寺公園內へ　岡田すみ子
●牛込區矢來町三番地中ノ丸三十一へ　出川に菜子
●牛込區市谷砂土原町三ノ二十三へ　飯田和香子
●沖繩縣那覇區字久茂地二千三百へ　長太とら子
●京橋區築地一丁目一〃地へ　大谷作子
●京橋區南傳馬町一丁目一番地へ　柳佐とや子
●府下北多摩郡府中町大字中ノ千古前へ　戸持てつ子
●長野縣上田町木町中井氏方へ　佐藤たキ子
●深川區西平野町一へ　中島四津子
●信州東筑摩郡松本町字和泉町へ　長貞久江子
●四谷區永住町三[illegible]杉方へ　土島きよ子

●交換寄贈雜誌（六月分）

●日本赤十字　京橋區築地二ノ二十一　日本赤十字社發行所
●統計集誌　京橋區山城町六　東京統計協會
●をんな　麴町區下二番町三十七　大日本女學會
●大阪醫學會雜誌　大坂市東區道修町一ノ六　大阪醫學會
●通俗衞生　大阪市西區土佐堀通三ノ廿八　大阪私立衞生會
●大日本婦人教育會雜誌　赤坂區表町二ノ十三　大日本婦人教育會
●藥學雜誌　牛込區下宮比町八　日本藥學會
●國家醫學會雜誌　本鄉區春木町一　國家醫學會發行所
●婦人世界　大坂南區末吉橋通四丁目　法學婦人會
●產科婦人科學雜誌　日本橋區濱町三ノ十　產科婦人科學會
●助產會雜誌　芝區三田綱町一　助產會雜誌出版部
●學校衞生　本鄉區西片町十　學校衞生研究會
●婦女新聞　牛込區東五軒町四十一　婦女新聞社
●愛國婦人　麴町區下二番町三十七　愛國婦人會發行所
●藥石新報　大阪西區江戸堀下通　藥石新報社
●工手の母　大坂北區西野田[illegible]家西の町　工手の母新聞社
●藥業新聞　大坂市南區心齋橋筋二丁目　藥業新聞社
●日本衞生週報　甲府市佐渡町十五　日本衞生週報社
●家庭新聞　熊本市北新坪井町　家庭新聞社
●兒童教育　德島[illegible]木屋町十　兒童新聞社
●日本婦人　府下澁谷村字常盤松御料地內　帝國婦人協會

●衞生報知　神戸市相生町一ノ廿七　私立神戸市衞生會
●京濱實業新報　神田區北神保町八　京濱實業新報社
●東京藥事新報　京橋區柳町四　東京藥事新報社
●東京教育雜誌　神田區錦町一ノ二十　東京教育雜誌發行所
●大日本私立衞生會雜誌　京橋區宗十郎町七　大日本私立衞生會
●婦人新報　赤坂區榎坂町五　婦人新報社
●產婆學雜誌　日本橋區濱町三ノ七　日本產婆學協會
●廣島衞生醫事月報　廣島市猫屋町　廣島衞生醫事月報社
●越佐教育雜誌　新潟市東仲通一番町　越佐教育雜誌社
●婦人と子ども　本郷區女子高等師範學校內　フレーベル會
●神經學雜誌　小石川區駕籠町東京醫科大學精神學教室內　日本神經學會
●新潟縣衞生會雜誌　新潟縣廳內　新潟縣衞生會
●婦人　神戸市三ノ宮町一丁目　婦人協會
●日本衞生新聞　神田區錦町三丁目　日本衞生新聞社
●家庭割烹新聞　神田區佐久間町四ノ六　家庭割烹講習會
●牟婁新聞　和歌山縣西牟婁郡田邊町中屋敷町　牟婁新聞社
●北海實業新報　北海道札幌區北二條東二丁目　北海實業新報社
●花柳病豫防の話　京橋區宗十郎町六　通俗衞生書院
●書籍新報　日本橋區本銀町四丁目　帝都社





私立大日本婦人衛生會

新潟支會規則

●第一條 本會は大日本婦人衛生會に屬し婦人衛生の研究を目的とし兼て一般慈善事業を爲すにあり●第二條 當支會の會員は左の六種とす終身會員一時限り出金貳拾五圓 特別會員毎月金參拾錢通常會員金貳拾錢 支會員毎月金拾錢乙全金五錢●第三條 入會せんとするものは役員に申出て其承認を得べし●第四條 會費毎月拾五錢以上を納むるものには本會衛生雜誌を配布す●第五條 會費は雜誌料として一部を本會へ納め殘金は銀行へ貯蓄して衛生慈善費金とす●第六條 支會には會長一名副會長一名評議員十五名幹事五名理事一名を置く會長副會長は總會に於て公撰し評議員幹事は會長之を撰任す 各役員の任期は一ヶ年とし再撰するを得役員は總て無給とす●第七條 支會は毎月六日通常會を開き衛生及び慈善に關する演說をなすべし●第八條 毎年一月總會を開き支會の要務を執行す●第九條 本會は毎年春期懇親會を催し時宜によりては慈善販賣店慈善演藝會等を開くことあるべし●第十條 天災事變に際し慈善救濟を要する場合に於ては特に會員中の有志者より物品の寄附を募ることあるべし 會員外の篤志者より臨時金品の寄附あるときは役員の協議を以て特待員又は贊成員となすべし●第十一條 一般慈善事業の贊助 天災事變の救濟の事務は役員會の決議により實施するものとす●第十二條 支會々員は服裝其他を質素にし集會の際は成可く綿服を着用すべし●第十三條 特に本規則に掲げざるものは私立大日本婦人衛生會の規則を準用す

明治廿九年四月創立

事務所新潟市學校町二番町四十七
和田くに子方

新潟支會

私立大日本婦人衛生會

高崎支會規則（明治三十五年四月創立）

●第一條 當支會は大日本婦人衛生會に屬し汎く婦人をして人生の健康を保持する方法を講究し衛生上の智識を開發せしめ因て社會全般の幸福を增進するを目的とす●第二條 當支會は大日本婦人衛生會高崎支會と稱し事務所を高崎市寄合町五十番地に置く●第三條 當支會は高崎地方在住の本會々員と支會限りの支會員とを以て組織す●第四條 本會又は支會の會員たらんとする者は住所姓名及び會員の種類を詳記し三個月分以上の會費を添へ申込まるべし●第五條 當支會に學術其の他の補益を與へらるゝ人士を推して訓師又は篤志贊助員となす●第六條 當會員にして轉居死亡又は退會の時は速に其旨事務所に通報せらるべし●第七條 支會に左の役員を置く會長一名副會長一名幹事六名評議員十二名●第八條 役員は會員中より公撰し會長副會長は役員中より互撰す 又幹事評議員は役員中より會長之を指名す 但役員の任期を一箇年とし再撰するを得●第九條 本會の特別贊成員を定員外の評議員とす●第十條 當支會は毎月一回講話會を開き 毎年一回總會を開く者とす 總會に於ては講話の外役員の改撰會務の報告等をなす●第十一條 會員及贊成員の家族並に篤志贊成員は集會に參列するを得 但時宜により男子の參列は謝絕することあるべし●第十二條 本會々員は本會費の外別に支會費を要せず支會限りの會員は支會費として一箇月金五錢を出す者とす●第十三條 總て會費の徵收は集會の席上に於てするを例とす 但三箇月分以上先前納すべし●第十四條 支會の所有金は支會の名義を以て銀行に預け置くものとす●第十五條 會員又は會員外より金員物品の寄附ある時は之を受納す●第十六條 本會所有の金員物品を慈善事業等に使用せんとするときは衆議に諮るものとす●第十七條 會員は服裝其他を質素にし集會の節は時間等を確實に履行すべし●第十八條 特に此規則に掲げざる者は本會の規則を準用す

●事務所 高崎市寄合町五十番地

高崎支會

私立大日本婦人衛生會 山形支會規則

第一條 本支會は私立大日本婦人衛生會々員山形市在住者を以て組織す●第二條 本支會に會長副會長の外幹事四名商議員若干名を置く會長副會長は公撰し幹事商議員は會長之を撰任す役員の任期は一ヶ年とす●第三條 本支會は毎月一回(第一日曜日)講話會を開き毎年一回(五月)總會を開き講話の外役員の撰擧庶務會計の報告をなす●第四條 入會せんと欲するものは宿所姓名並に第五條の通り會費を添へ會員に紹介を依賴すべし本支會を退會せんとする時は其旨幹事に申出つべし●第五條 本會々費は會計幹事に納むべし但し六ヶ月又は一ヶ年分新に入會のものは其月より六月又は十二月迄の分を一時に納むべし●第六條 服裝は樸誠質素なるを要す上着及羽織は綿布を用ひるを禁ず

明治三十三年二月四日創立

事務所山形市旅籠町新築四通二百八十九、北島氏方

山形支會

私立大日本婦人衛生會 宇都宮支會規則

第壹條 本支會ハ私立大日本婦人衛生會宇都宮支會ト稱ス●第貳條 本支會ニ會長一名副會長一名評議員拾五名幹事四名ヲ置ク會長副會長ハ公撰シ評議員幹事ハ會長之ヲ撰任ス各役員ノ任期ハ一ヶ年トス●第參條 毎月壹回(第一日曜日)講話會ヲ開キ毎年五月講話ノ外役員ノ改撰庶務會計ノ報告ヲナス●第四條 入會ハ宿所姓名ニ第五條ノ通リ會費ヲ添ヘ事務所ヘ申込ミ又ハ會員ニ紹介ヲ依賴スベシ本支會ヲ脱會又ハ本會ヲ退會セントスルトキハ其旨事務所ニ屆出ヅベシ●第五條 本會々費ノ外別ニ支會々費ヲ要セズ會費ハ一時ニ六ヶ月又ハ十二月分、新タニ入會ノモノハ其月ヨリ六月又ハ十二月迄ノ分ヲ納ムベシ●第六條 本支會ハ別ニ支會々員ヲ置キ支會會費トシテ一ヶ月金五錢ヲ納ムルモノトス●第七條 講話會ニ出席ノ節ハ成ルベク家族又タハ知合ノ婦人ヲ誘引シ陪聽セシムベシ●第八條 服裝ハ樸誠質素ナルヲ要ス上着及羽織ハ綿布ヲ用フルヲ禁ズ第九條 特ニ支會規則ニ掲ケザルモノハ本會ノ規則ヲ準用ス

明治三十四年二月三日創立

事務所宇都宮市馬場町

宇都宮支會

私立大日本婦人衛生會 米澤支會規則

第一條 當會ハ私立大日本婦人衛生會米澤支會ト稱シ衛生上ノ研究ヲ目的トシ互ニ智識ヲ交換シ社會ノ幸福ヲ增進スルニアリ

第二條 支會事務所ハ當時假ニ當時免許町一三六九番地猪股方ニ置ク

第三條 當支會ニ會長一名副會長一名幹事五名ヲ置ク其任期ハ各一年トス

第四條 毎月一回(第二日曜午後一時ヨリ四時迄)講話會ヲ開キ毎年五月總會ヲナシ役員改撰庶務會計等ノ報告ヲナス

第五條 入會ハ會員ノ紹介ヲ經テ宿所姓名ニ會費ヲ添ヘ事務所ヘ申込又退會セントスル者ハ其旨事務所ニ屆出ヘシ
但シ已納ノ會費ハ返附セス

第六條 當支會ノ會費ハ左ノ三種トシテ特別會員毎月金參拾錢通常會員甲毎月金拾五錢乙毎月金五錢前納スルモノトス
但會費拾五錢以上納ムル者ニハ本會雜誌ヲ配附ス

第七條 會費ハ雜誌料トシテ本會ヘ納メ一部ハ支會經費ニ充テ殘餘ハ銀行ヘ貯蓄シテ支會事業ノ資金トナス

第八條 會員及員外篤志者ヨリ金品ノ寄贈アル時ハ役員協議ノ上特待員又ハ贊成員トナスヘシ

第九條 講話ノ節ハ汎ク婦人ノ傍聽ヲ許ス

第十條 支會々員ノ質素ヲ旨トシ集會ノ際ハ可成木綿服ヲ着用スルヿ

第十一條 特ニ支會則ニ掲ケサルモノハ本部ノ會則ヲ準用ス

事務所米澤市免許町一三六九

米澤支會

廣島衛生醫事月報

毎月一回二十日發行

定價 一部 金五錢
六部（半年分） 金參十錢
十二部（一年分） 金六十錢

◉廣告料一行（廿四字詰） 金拾錢

廣島衛生醫事月報は廣島縣下唯一の專門雜誌にして苟も衛生醫事に關する行政上の利害得失を論議講究するの自由あり其項目左の如し

論説 諸家の衛生醫事に關する正確なる論説を掲載すべし

衛生醫事 適切有益なる講義、演説、談話、實驗等を掲けて讀者諸彥に紹介せん

摘錄 切に斬新なる內外諸家の卓絕、奇拔なる原著より要を摘し粹を錄す

問答 衛生醫事に關する質疑應答を世に紹介すべし

雜錄 醫事衛生界に於ける評論、史傳、通信等を集む

統計 この道に關する諸般の統計を載す

寄書 江湖諸彥の投書寄稿は甘んじて此欄に掲く

會報 醫事衛生及藥學等に關する諸會の記事は詳細確實に報道す

公文 衛生醫藥業に關する時々の官令、公報は本欄に掲けて洩すことなし

雜報 內外の醫事衛生藥業界に關する日々の出來事は精細正確迅速に報道す

廣告 斯道に關する有益なる廣告を登載す

發行所

廣島市猫屋町百〇六番屋敷

廣島衛生醫事月報社

私立大日本婦人衛生會徽章規程

第一條　大日本婦人衛生會々員は其會員たることを表するため左の徽章を用ゆ

第二條　會員章は本會幷に支會の集會に出席する場合は勿論襟止兼用の便あるを以て成るべく平素佩用して廣く本會の普及を圖るを要す

第三條　本會徽章は左の實價を以て會員に頒つ





●本會徽章料左の如し

●通常會員章
第三號
メツキ製拾二錢、送費六錢

●第二號
正銀製四拾錢、送費六錢

●終身及特別會員章
第一號
七十錢（黑繪箱入送費九錢）
六十錢（桐箱入送費六錢）

●入會注意

●御入會の際は三ヶ月以上の會費前納にて申込まるへし會員章は上段記載の實價にて御頒ち申候へども送費とも必らす御前納のこと●東京府下に限り毎月雜誌の配達を兼れ會費領收人を差出すべしと雖も郡部の方は地方會員の部として領收者差出不申候也但東京府下の會員にても會費前納せられ合せて郵送料なも御納付相成候へば雜誌發行次第直ちに郵送可致候●追て支會々員は支會へ會費御納付のことゝす●會費は郵便小爲替にて本會事務所々在の郵便局（東京麹町飯田橋通）宛振出あるべし又た價格表記通運便、何にても差支なし●會費受領證を要する節は送費として郵劵一錢五厘封入せられたし●轉居せられたるときは其の旨必らず本會事務所宛通知せらるべし

●會員御紹介下され候御方には其人數に應じ本會雜誌進呈の事

廣告料　一頁五圓半頁其二分一以下同之　●特別廣告一頁拾圓半頁其二分一以下同之

本誌一部定價貳拾錢

東京市麹町區飯田町六丁目三番地
發行所　私立大日本婦人衛生會
東京牛込區矢來町三番地
編輯兼發行人　田中徳三郎
東京牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷人　渡邊智

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場印刷

明治三十七年七月二十四日印刷　明治三十七年七月二十七日發行（毎月一回二十日發行）